

# 黒石遺跡

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 0

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第59輯

# 黒石遺跡

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 0

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



I・II・III区北側（北より）



III区南側・IV区（北より）



III区南側全景（北より）



250-OB全景（西より）

# 序 文

岸和田市は南北に細長い行政区を持ち、その南端は和歌山県と接しています。府境にそびえる葛城山系の北側は南側に比べて、緩やかな丘陵部、段丘部になって大阪湾まで続いています。この丘陵部を縫って北に流れる牛滝川沿いは一般に山直谷と呼ばれ、古くからの遺跡が川沿いの段丘面上に数多く知られています。ここに報告いたします黒石遺跡はその遺跡群の南よりにあります。

黒石遺跡周辺の遺跡については、山直谷を縦断するように計画されている主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線の建設にともなって発掘調査を実施し、これまでに報告書も刊行してきております。これまでの調査成果では、山直谷では弥生時代以来時とともに谷奥部へ向かって開発が進められて、古代条里が施行されている様子がうかがえます。

古墳時代は北よりの山直北遺跡、三田遺跡を中心があり、飛鳥時代には黒石遺跡の北側の水込遺跡や、二俣池北遺跡あたりまで生活の場が広がっていきます。黒石遺跡や南の山直中遺跡では、奈良時代から平安時代頃にムラが現われているようです。黒石遺跡の調査成果を考えるにあたってこの地域の全体的な推移も参考にしていただければ幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成2年5月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈 祐 吉

## 例　　言

1. 本書は主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設予定地内に所在する、岸和田市黒石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 発掘調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第2班技師木下亘、吉村和昭が担当し、現地調査を平成元年5月2日より同年12月25日迄の約8ヶ月間おこなった。
4. 発掘調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
5. 報告書作成にあたっては、土橋理子、北野隆亮両氏（奈良県立橿原考古学研究所）の御教示を得た。記して謝意を表したい。
6. 発掘調査は国土座標第VI系を基準に4mメッシュの地区割りを行った。又、これとは別に調査区を便宜的に区分しI～IV区の呼称を併用した。
7. 遺構写真は調査担当者が撮影し、空中写真は阪急航空株式会社が撮影した。
8. 土層及び土器の色調については、「新版 標準土色帖」5版 1976年に準拠した。
9. 遺物図版中の遺物個々に付した番号は、本文中挿図番号及び実測図番号を示す。
10. 報告書の執筆は、調査担当者が分担して行い文末にその文書を記した。尚、石器については当協会岸本道昭による。

# 本文目次

## 序

### 例言

第I章 調査に至る経緯	（木下）	1
第II章 地理的・歴史的環境	（木下）	1
第III章 調査成果		5
第1節 調査方法	（吉村）	5
第2節 基本層序と遺物包含層出土遺物		11
1. 基本層序	（吉村）	11
2. 遺物包含層出土遺物	（吉村・岸本）	12
第3節 検出遺構と出土遺物		26
1. I区	（木下）	26
2. II区	（木下）	29
3. III区	（吉村・木下）	32
4. IV区	（木下）	62
第IV章 まとめ	（木下・吉村）	66

# 図版目次

## 図版

1	調査地全景 (1/2500)	5	2	III区検出遺構 (西より)
2	III区南側全景 (1/200)	6	1	III区北側全景 (北より)
3	1 I区全景 (南より)	2		III区北側全景 (南より)
2	I区耕作痕 (東より)	7	1	III・IV区全景 (南より)
4	1 I区検出遺構 (西より)	2		III区南側全景 (南より)
2	009-00全景 (北より)	8	1	III区検出遺構 (北より)
5	1 II区全景	2		III区検出遺構 (西より)

9	1	165-O P、166～168-00全景 (西より)	14	2	184-O S 全景（西より）
			15	1	229-O P 遺物出土状態
2		166-O O全景（西より）		2	199-O O全景（西より）
10	1	200-O O全景（南より）	16	1	301-O W全景（東より）
2		200-O O遺物出土状態		2	201-O S 全景（南より）
11	1	200-O O遺物出土状態	17	1	I 区拡張部全景（東より）
2		266-O O全景（北より）		2	III区拡張部全景（西より）
12	1	250-O B全景（西より）	18		遺物包含層出土遺物
2		250-O B全景（南より）	19		遺物包含層・301-O W出土遺物
13	1	228-O B全景（北より）	20		各遺構出土遺物（1）
2		228-O B全景（南より）	21		各遺構出土遺物（2）
14	1	184-O S 全景（南より）	22		184-O S 出土遺物

## 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺地形図（1/50000）	2
第2図 調査地位置図	5
第3図 調査地区割図	6
第4図 調査地セクション図（1）	7～8
第5図 調査地セクション図（2）	9～10
第6図 遺物包含層出土遺物実測図（1）	13
第7図 遺物包含層出土遺物実測図（2）	14
第8図 遺物包含層出土遺物実測図（3）	15
第9図 遺物包含層出土遺物実測図（4）	16
第10図 遺物包含層出土遺物実測図（5）	17
第11図 遺物包含層出土青磁写真	18
第12図 遺物包含層出土白磁写真（1）	19
第13図 遺物包含層出土白磁写真（2）	19
第14図 遺物包含層出土遺物実測図（6）	23
第15図 遺物包含層出土遺物実測図（7）	24

第16図	遺物包含層出土遺物実測図（8）	24
第17図	遺物包含層出土遺物実測図（9）	25
第18図	遺構全体図	27～28
第19図	各遺構出土遺物実測図（1）	30
第20図	各遺構出土遺物実測図（2）	31
第21図	115-O O平・断面図	32
第22図	116-O O平・断面図	32
第23図	165・206-O P、166-O O平・断面図	33
第24図	167・168-O O平・断面図	33
第25図	165-O P、166～168-O O出土遺物実測図	34
第26図	175-O S平・断面図	36
第27図	175-O S出土遺物実測図	36
第28図	176-O O出土遺物実測図	38
第29図	184-O S平・断面図	39
第30図	184-O S出土遺物実測図（1）	40
第31図	184-O S出土遺物実測図（2）	41
第32図	184-O S出土遺物実測図（3）	42
第33図	199-O O平・断面図	47
第34図	199-O O出土遺物実測図	48
第35図	201-O S平・断面図	51
第36図	204-O O平・断面図	52
第37図	228-O B平・断面図	53
第38図	229・230-O P出土遺物実測図	54
第39図	200-O O平・断面図	55
第40図	200-O O出土遺物実測図	56
第41図	250-O B平・断面図	59
第42図	266-O O平・断面図	60
第43図	266-O O出土遺物実測図	61
第44図	301-O W平・断面図	62
第45図	301-O W出土遺物実測図（1）	63

第46図	301-OW出土遺物実測図（2）	64
第47図	調査地周辺地形図（1/40000）	66

## 表 目 次

第1表	遺物包含層出土輸入磁器観察表（1）	20
第2表	遺物包含層出土輸入磁器観察表（2）	21
第3表	遺物包含層出土輸入磁器観察表（3）	22
第4表	037-OP, 116・177・178・195・271-OO出土遺物観察表	30
第5表	018・046・154・163・197・308-OS出土遺物観察表	31
第6表	165-OP, 166～168-OO出土遺物観察表	35
第7表	175-OS出土遺物観察表	37
第8表	176-OO出土遺物観察表	38
第9表	184-OS出土遺物観察表（1）	44
第10表	184-OS出土遺物観察表（2）	45
第11表	184-OS出土遺物観察表（3）	46
第12表	199-OO出土遺物観察表（1）	49
第13表	199-OO出土遺物観察表（2）	50
第14表	229・330-OP出土遺物観察表	54
第15表	200-OO出土遺物観察表（1）	57
第16表	200-OO出土遺物観察表（2）	58
第17表	266-OO出土遺物観察表	61
第18表	301-OW出土遺物観察表	65

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

黒石遺跡は、大阪府岸和田市山直中町一帯に広がる遺跡である。当遺跡は、1983年度に大阪府教育委員会が実施した都市計画道路府道磯之上山直線（主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線）計画予定地内の遺跡分布調査により、新たに確認された遺跡である。分布調査の結果、今回の調査対象地域からは、古墳時代～近世までの須恵器・土師器・陶磁器などの採集が報告されている。しかし、遺跡の具体的な内容に就いては全く不明で、採集される遺物から中世頃の遺跡である可能性が考えられていた。

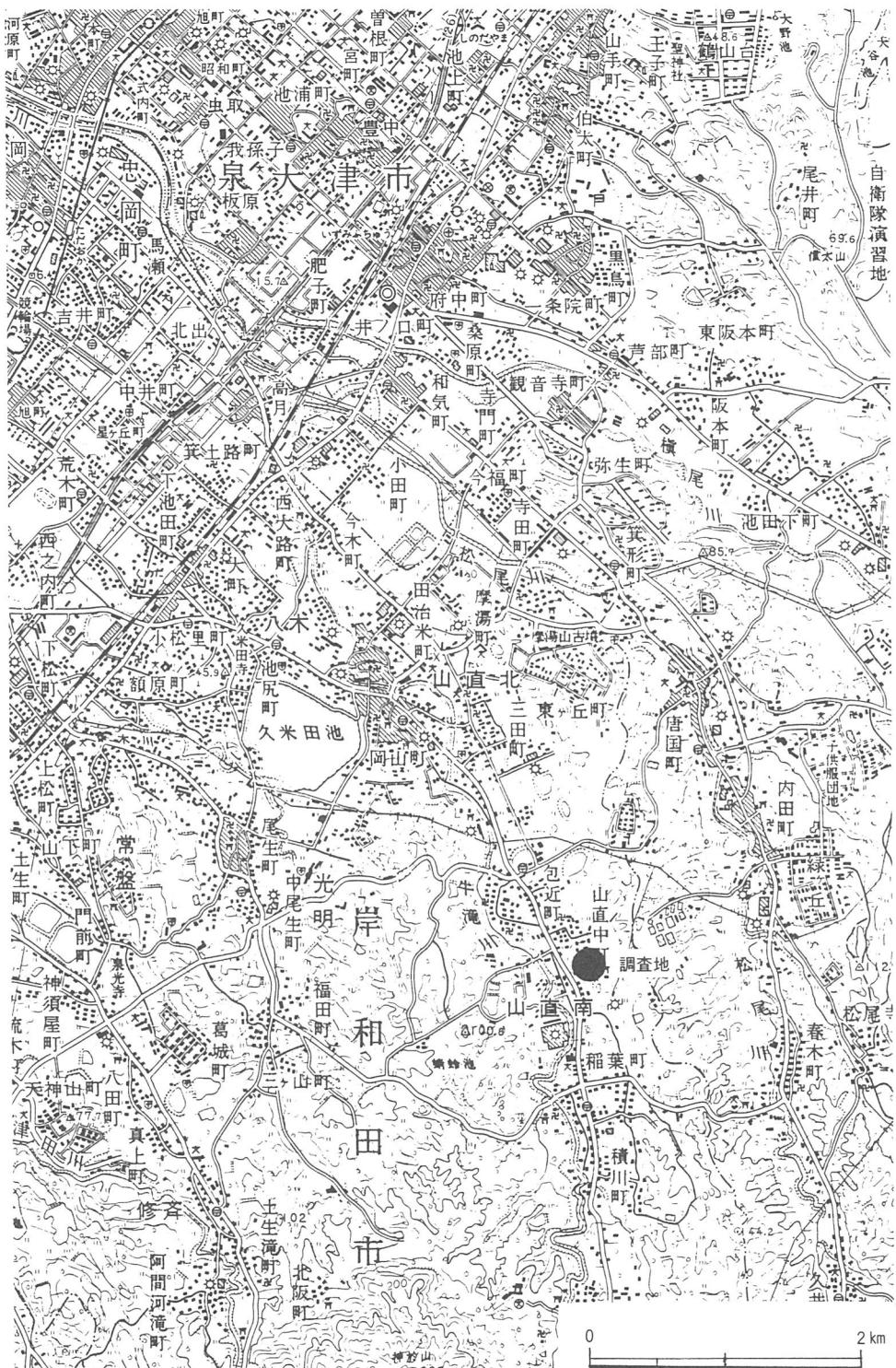
この分布調査結果に基づき、大阪府教育委員会は道路建設に先立ち、路線敷予定地内の全面発掘調査が必要との判断を下し、その旨、大阪府土木部へ通知すると共に、発掘調査の取り扱いに就て協議に入った。協議の結果、府道磯之上山直線建設工事が関西国際空港関連事業である点に鑑み、発掘調査は大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施する運びとなった。

現地調査は、1989年5月2日から同年12月25日迄の約8ヶ月間行った。又、発掘対象面積は約4500m<sup>2</sup>である。

## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

泉州地域は南北に連なる和泉山脈から派生する丘陵地形が発達している。これらの丘陵は、大阪層群を基盤層とするもので、和泉山脈に源を発する数多くの中小河川がこの丘陵を開析している。その結果、大小様々な谷地形の展開をみることができる。これら丘陵部から北側は平坦部となっており、狭小な沖積地が形成されている。

これら数多く形成された開析谷の1つである通称山直谷に、ここに報告する黒石遺跡は立地している。山直谷は、標高857mの和泉葛城山に源をもつ牛滝川が開析したもので、長さ約6.7kmを測ることができる。牛滝川の右岸には、河岸段丘の発達が顕著に認められるが、当遺跡もこの段丘上に立地している。谷の開口部からは、約2.3km奥へ入った地点である。山直谷には数多くの遺跡が点在しているが、その大半はこの右岸段丘に立地しており、左岸には比較的少ない。



第1図 調査地周辺地形図 (1/50000)

当遺跡の現状は、水田あるいは畑地として利用されていた。調査地は北西方向へ緩やかな傾斜をもつ斜面地で、牛滝川に向かって段々畑として開墾されている。又、すぐ東側には、北西方向にのびる丘陵がせまっている。この丘陵は、果樹園、植木畠などとして利用されている。遺跡の標高は、調査区北端で約59.3m、南端で約62.5mを計り、3.2mほどの比高差をもっている。

次に黒石遺跡をとりまく歴史的な環境についてふれておきたい。

黒石遺跡は、都市計画道路府道磯之上山直線建設予定地内の分布調査によって新たに確認された遺跡である。この分布調査の結果、周知の遺跡を含む16遺跡が確認されている。この内、周知の遺跡については、さらに遺跡の面的な拡大が明らかとなった。岸和田市域の歴史的環境については、既にいくつか公刊された磯之上山直線関連の発掘調査報告書の中で詳細に述べられており、ここではその概略について記すこととしたい。

岸和田市域において旧石器時代に遡る遺跡は、現在までのところ明らかにはなっていない。しかし、表面採集資料ではあるが、山直谷入口の丘陵上に立地する岡山遺跡をはじめとして、葛城山頂遺跡・琴山遺跡などで国府型ナイフ形石器が発見されている。<sup>(1)</sup>又、発掘調査では、上フジ遺跡からも同様のナイフ形石器が検出されている。<sup>(2)</sup>

縄文時代に入ると数ヶ所の遺跡が知られる様になる。1961年に発掘調査が実施された春木八幡山遺跡は、海浜部に立地する遺跡で、縄文時代後期を主体とする土器類が出土している。<sup>(3)</sup>又、箕土路遺跡からは、中期前半の土器の出土が報告されている。山直谷地域では軽部池西遺跡・山ノ内遺跡の調査が行われ、縄文時代後期の遺構・遺物を検出している。<sup>(4)</sup>とりわけ、山ノ内遺跡では、後期の土器と共に多量の石器が出土し注目を集めた。<sup>(5)</sup>

次に弥生時代に入ると山直谷入口周辺部では、西大路・軽部池西・山ノ内などの各遺跡が知られるようになる。西大路遺跡では、堅穴住居や自然河道・水利施設などが検出されている。<sup>(6)</sup>堅穴住居の中には、ベッド状遺構を有するものもみられる。弥生時代の遺跡の分布は、山直谷入口までの平坦地に存在しており、谷奥の入り込む様子はみられない。谷の中への開発が開始されるのは、次の古墳時代に入ってからの事である。

古墳時代では、山直谷入口部分の東側に摩湯山古墳が築造される。<sup>(7)</sup>摩湯山古墳は、全長約200mを計る前方後円墳で、岸和田市域最大の規模を有している。時期的には採集されている円筒埴輪に鰐付のものが含まれる点や器面の調整手法などから、川西編年II期に属し、前期末葉に位置付けられる。摩湯山古墳の西方約2km、牛滝川左岸の久米田台地には

久米田古墳群が摩湯山古墳にやや遅れてその築造を開始する。山直谷内では、摩湯山古墳<sup>(8)</sup>の南側に位置する三田遺跡からほぼ同時期の土壙墓165基が検出されている。しかし、これらの墓域に対応する集落は、現在の所未検出である。後期に入ると3基の小規模な円・方墳がつくられている。

奈良時代以降になると、三田遺跡・上フジ遺跡・二俣池遺跡・水込遺跡・芝ノ垣外遺跡<sup>(9)</sup>などが知られる様になり、谷奥への開発が進行していく状況を見ることができる。山直北遺跡では平安時代の大型建物を検出し、綠釉香炉などが検出されている。

以上の様に、山直谷周辺は、近年の活発な発掘調査により、遺跡が稠密に分布することが明らかとなった。従来、遺跡の空白地帯であった当地域の歴史的環境も徐々に復元されつつある。今後の調査の進展に伴い、山直谷の開発の歴史もより一層明確にできるであろう。

(木下)

#### 註

- (1) 「市内出土遺物図録 玉谷哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会 1976
- (2) 『第5回 泉州の遺跡 5年間の発掘調査成果』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990
- (3) 『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』岸和田市教育委員会・(財)古代学協会 1965
- (4) 『輕部池西遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- (5) 『第2回 泉州の遺跡—昭和61年度発掘調査遺跡展—』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- (6) 『西大路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- (7) 『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会 1979
- (8) 言(7)に同じ
- (9) 『三田遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- (10) 『芝ノ垣外遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987

## 第III章 調査成果

### 第1節 調査方法

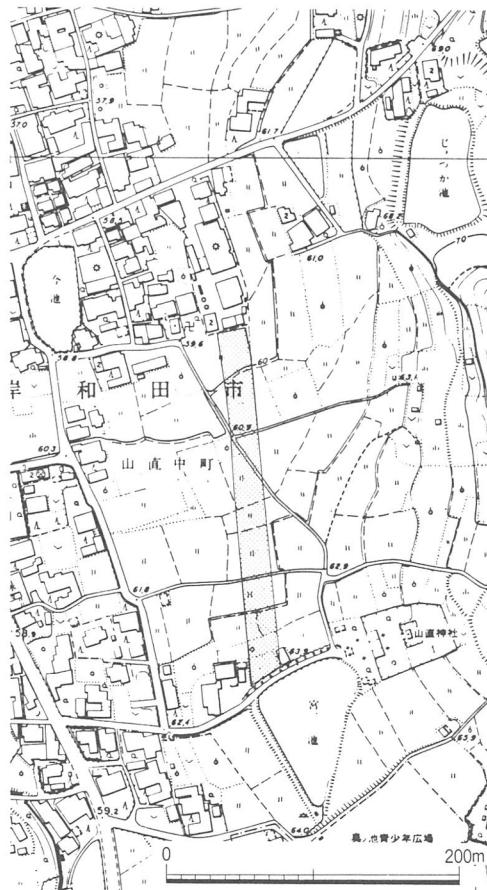
発掘調査の実施にあたっては、国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI座標系を使用して、4 mメッシュを最小の区画として、地区割を行った。この区画は、大阪府発行新版の1/2500地形図（都市計画図）を基本としている。はじめにこの地形図を12等分して500 mの方形区画を作り、この区画にA～Lまでの記号をつける。次に500m×500mの区画を25等分して100mの方形区画を作り、01～25までの2桁の数字で示す。そして最後にこの区画を625等分して4 m×4 mの区画を作る。この区画は2文字のアルファベットで示され遺物取り上げの最小単位となる。また本遺跡では、里道等により調査地が分断されていることから、便宜上 I～IV区の名称を同時に使用した（第3図）。

調査では、現水田及び旧水田は重機による掘削を行い、その下の遺物包含層からは人力による掘削を実施した。

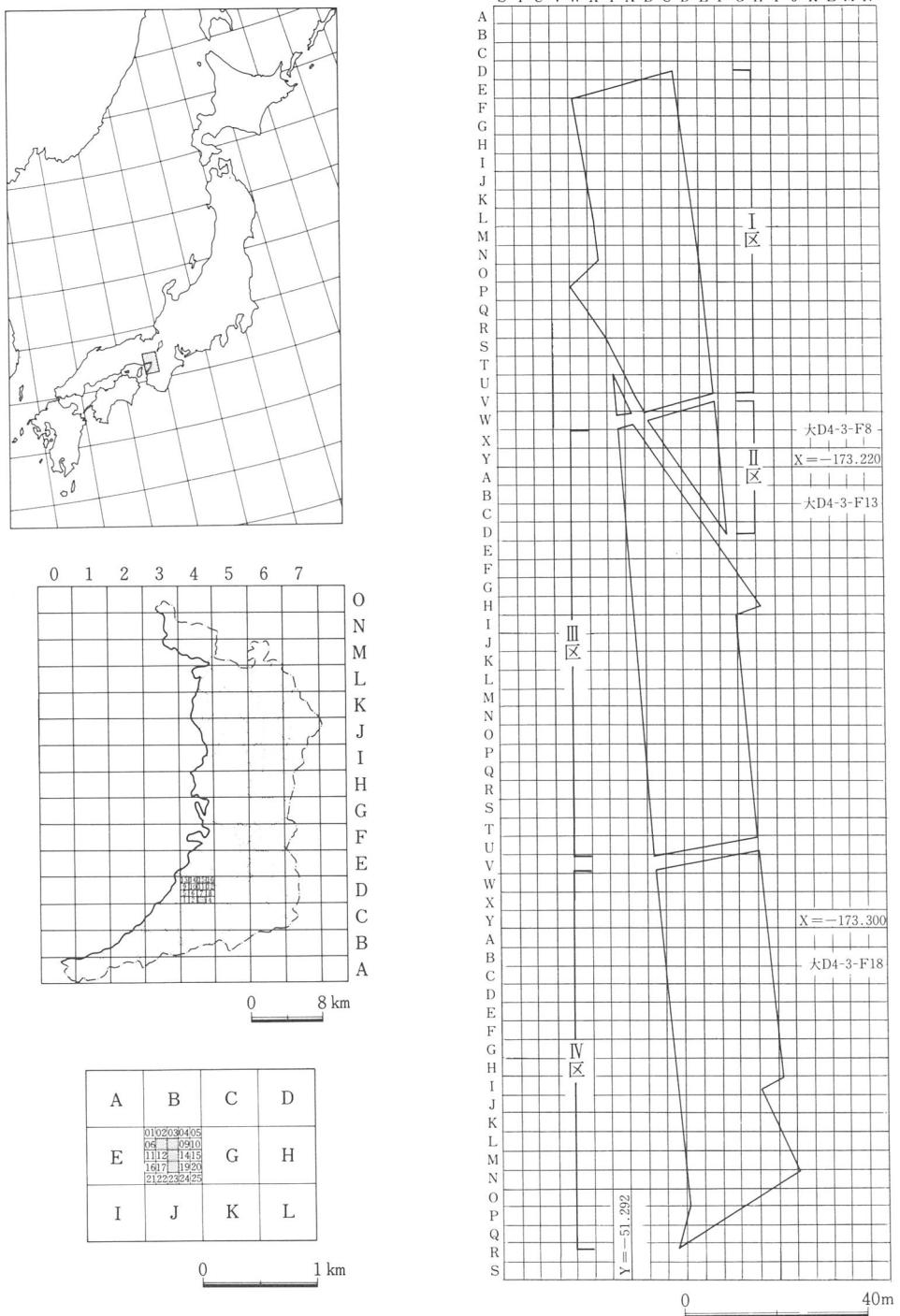
なお、以下報告書中で使用する遺構の記号は、当協会の発掘調査・整理作業全般に至るまでの一定基準を定めた規程集の取り決めた従ったものである。

本報告書で使用した記号は以下の通りである。

建物	O B	土坑	O O
柱穴	O P	溝	O S
井戸	O W		

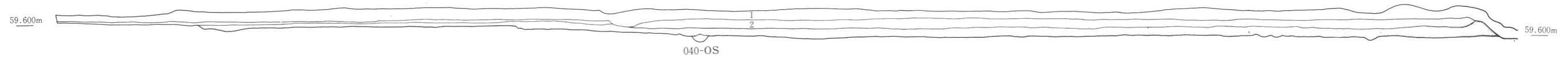
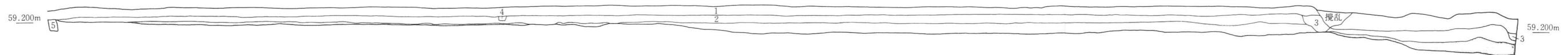


第2図 調査地位置図

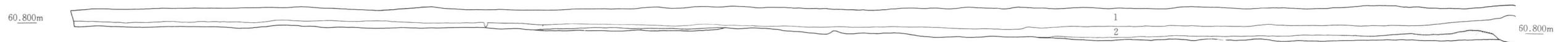
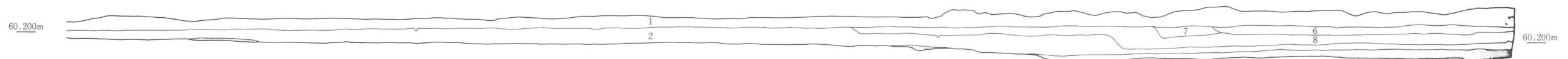


第3図 調査地区割図

I 区 西壁セクション



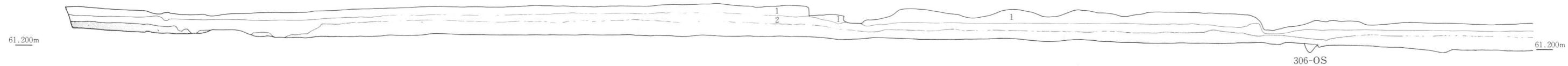
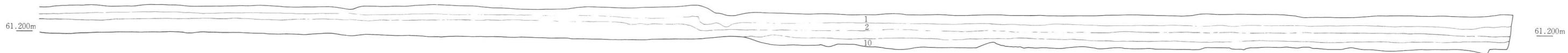
III区 西壁セクション



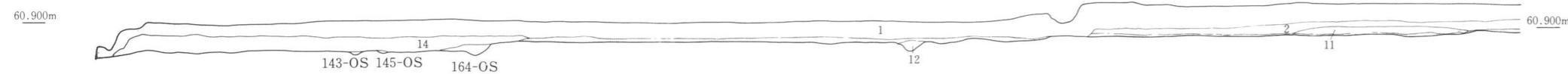
第4図 調査地セクション図(1)



### IV区 西壁セクション

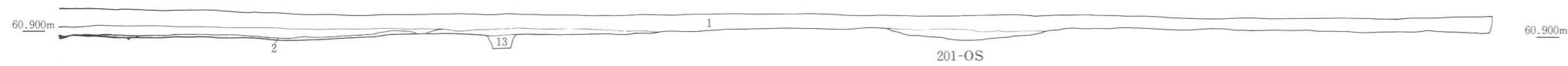


### III区 東壁セクション



- 1. 水田耕作土〔第1層〕
- 2. 旧水田耕作土〔第2層〕
- 3. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土(旧水田側溝)
- 4. 5Y6/1 灰色粘質土(水田側溝)
- 5. 碎屑(旧水田側溝)
- 6. 10YR6/6 明黄褐色土(盛土)
- 7. 10YR6/6 明黄褐色粘質土(旧水田畦畔)
- 8. 旧水田耕作土
- 9. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土(旧水田畦畔)
- 10. 7.5YR5/6 明褐色+10YR5/1 褐灰色土(地山の角礫を多量に含む)〔第5層〕
- 11. 旧水田耕作土
- 12. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質粘土(マンガン斑多く含む)
- 13. 2.5Y5/3 黄褐色+10YR4/6 褐色砂質粘土
- 14. 7.5YR6/8 橙色(地山まじり)

遺物包含層〔第3・4層〕  
I区 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質土  
10YR7/8 黄橙色砂質粘土  
III区(西壁) 5YR6/1 褐灰色粘質土  
(東壁) 2.5Y6/2 灰黃色砂質粘土(多量のマンガン含む)  
IV区 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質粘土  
7.5YR5/4 にぶい褐色砂質粘土



0 4 m

第5図 調査地セクション図(2)

## 第2節 基本層序と遺物包含層出土遺物

### 1. 基本層序

調査区が里道・水路により I～IV区にわかかれていることにより、また同一区内においても水田の段が変わることにより若干の部分的な相違がみられるものの、調査区内の土層堆積状況は、基本的に上から現水田耕作土及び床土、旧水田耕作土及び床土（江戸時代）、遺物包含層、地山の順を示している。調査においては、現水田耕作土及び床土を第1層、旧水田耕作土及び床土を第2層、遺物包含層を第3・4層と呼称し、遺物の取り上げにおいてもこの名称を使用した。なお遺物包含層はI区とIV区において、土質・土色により上下2層に細分できることから、便宜上、上を第3層、下を第4層と区別した。一方、IV区北部においては、地山が傾斜下降しており、この部分で第3・4層と地山の間に整地土と考えられる微量の土器を含む地山まじりの土が1層存在する。これを第5層と呼ぶ。

#### I区

第1・2層の現・旧水田の下は、2.5Y6/2灰黄褐色土の第3層が南端部分で途切れる以外は全域で存在する。また北端から5m～19m付近と35m～57m付近で、第3層下に第4層がみられる。前者は2.5Y5/2暗灰黄色土であり、後者は10YR7/8黄橙色砂質粘土である。なお地山は10YR5/6黄褐色土である。

#### III区

北端ではみかん畑のため土層堆積に若干の乱れがみられるものの、第1・2層の2つの水田の下に遺物包含層の堆積がみられるという基本層序に変わりはない。III区においては遺物包含層は1層であり第4層は存在しない。第3層は、地形に沿って地山が上昇していることと旧水田造成による削平の関係から、水田の段が上がる直前あたりではところどころ途切れる。III区における第3層は5YR6/1褐灰色粘質土である。なお地山は多量のマンガン斑を含む10YR5/6黄褐色土、多量のマンガンを含む10YR4/4褐色土、10YR7/8黄橙色土と変化に富んでいる。

#### IV区

第1・2層下の遺物包含層は2層に分層できる。第3層は10YR6/4にぶい黄橙色砂質粘土、第4層は7.5YR5/4にぶい褐色砂質粘土であり、第5層（整地層）は7.5YR5/6明褐色+10YR5/1褐灰色土である。なお地山は礫を含む10YR4/4褐色土である。

## 2. 遺物包含層出土遺物

遺物包含層から出土した遺物について、以下、順に説明していきたい。

### 土師皿（1～14）

形態より以下の4つに分類できる。口縁部は外上方に立ち上がり体部に段をもち底部は丸みをもつもの（2・5・10）、口縁部が外上方に立ち上がり底部が平坦なもの（3・4・8）、口縁部が外反し体部に段があり底部が丸いもの（7）、口縁部が外反し底部が平坦なもの（1・6・9）の4つである。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、内面ナデを施す。外面は指頭圧痕を残すものと、ナデでこれを消すものの両者がある。

### 瓦器皿（15～25）

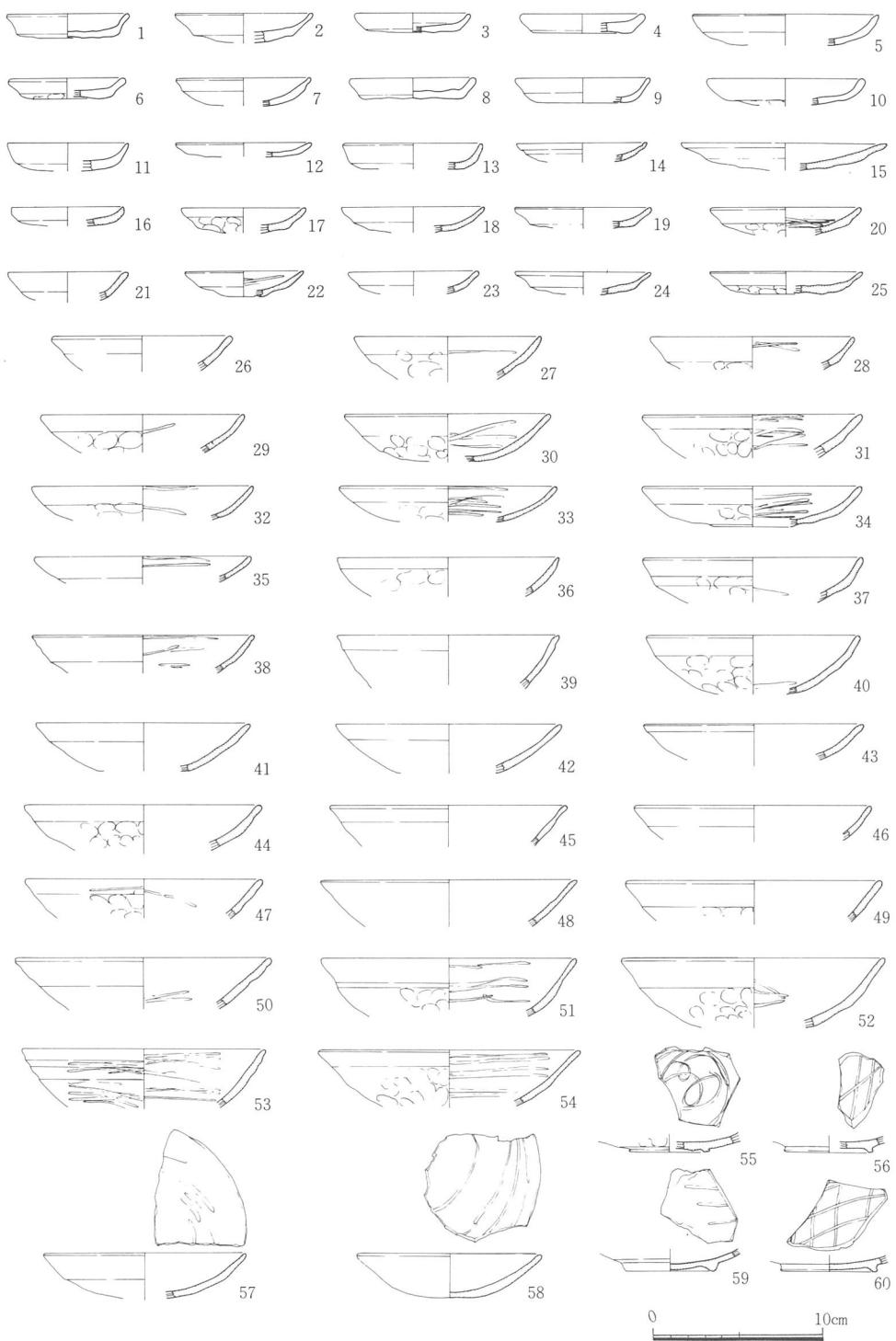
形態より分類すれば以下の通りである。しかし同じ分類でもプロポーション、法量は様々である。口縁部が内彎し、底部が丸いもの（16）、口縁部が外上方に立ち上がり底部が丸いもの（17・18・21）、口縁部が外上方に立ち上がり底部が平坦なもの（13・14・20・22）、口縁部が外反し体部に段をもち底部は丸味をもつもの（15・23・24）、口縁部が外反し体部に段をもち平坦なもの（19・25）の5つである。調整は口縁部にヨコナデ、内面にナデを施す。外面は指頭圧痕を残すものと、ナデを消すものがある。また20、22は内面にヘラミガキを施す。

### 瓦器椀（26～80）

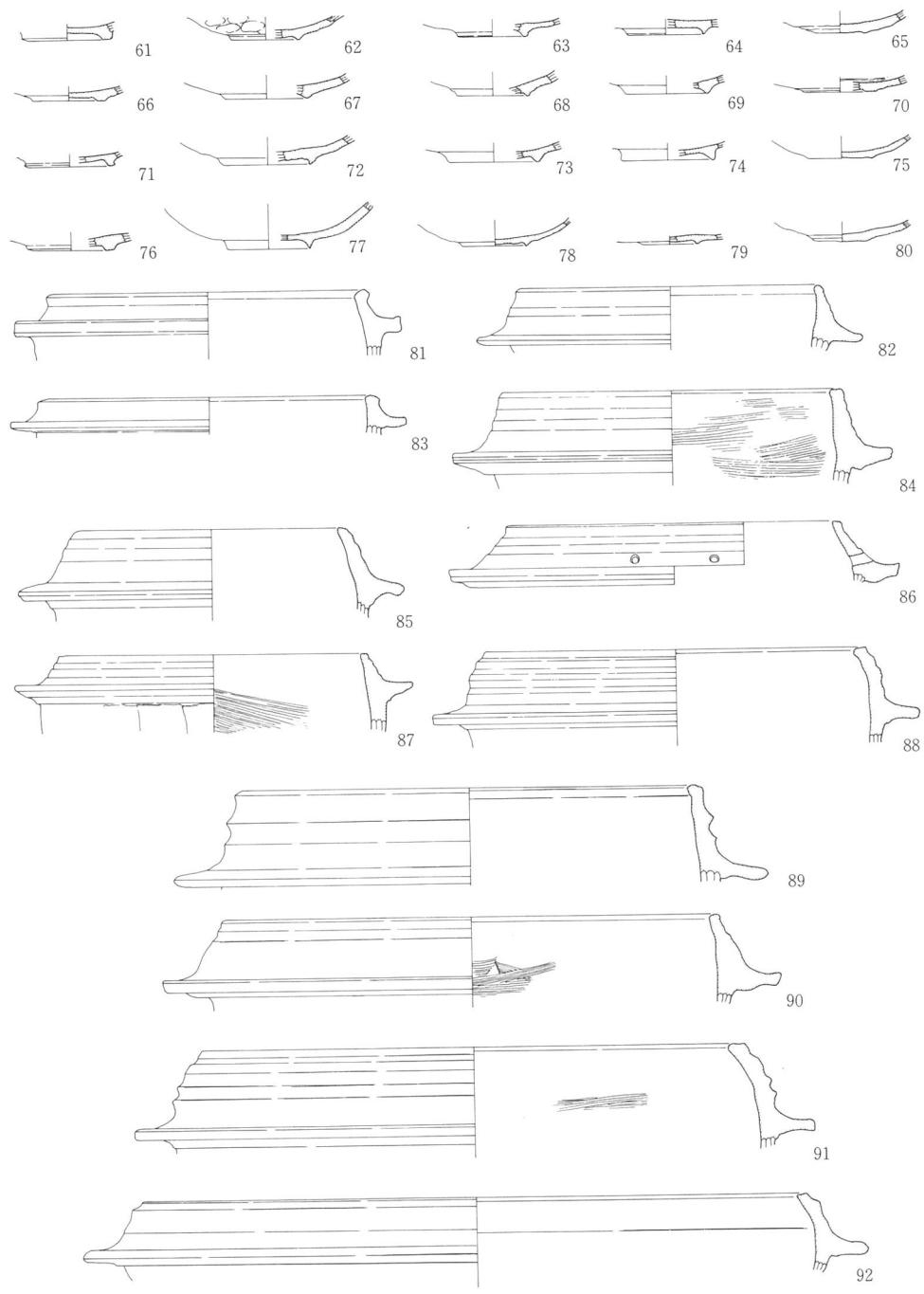
14cm以上と大きな口径をもち器高も高く、内外面ともにヘラミガキを施すものから、口径が10cm台と縮小し、器高も低く、高台をもたないものまで、出土する瓦器は年代的にかなり幅を持っている。高台部のみの破片をみても同様で、断面逆台形のもの、三角形のもの、そして非常に退化し形骸化しているものまで多様である。およそ12世紀代のものから15世紀にはいるものまで含まれている。

### 羽釜（81～92）

第7図に掲載したもので81は土師質であとは瓦質である。形態からみると、およそ、口縁部が短く内傾気味にたちあがり、口縁端部が肥厚するもの（81・83）と、内傾気味の口縁部に数条の凹線をめぐらせるもの（82・84～94）に大別できる。前者は内・外面にナデ調整を施す。後者は口縁の内傾の度合や、口縁端部を内傾させるかどうかにより細分できるが、およそ菅原氏分類の和泉D型に属するものと考えられ、14～15世紀代のものである。<sup>(1)</sup> 調整は、口縁部はナデ調整を施しており、体部内面にハケ調整を施すものがみられる。ま

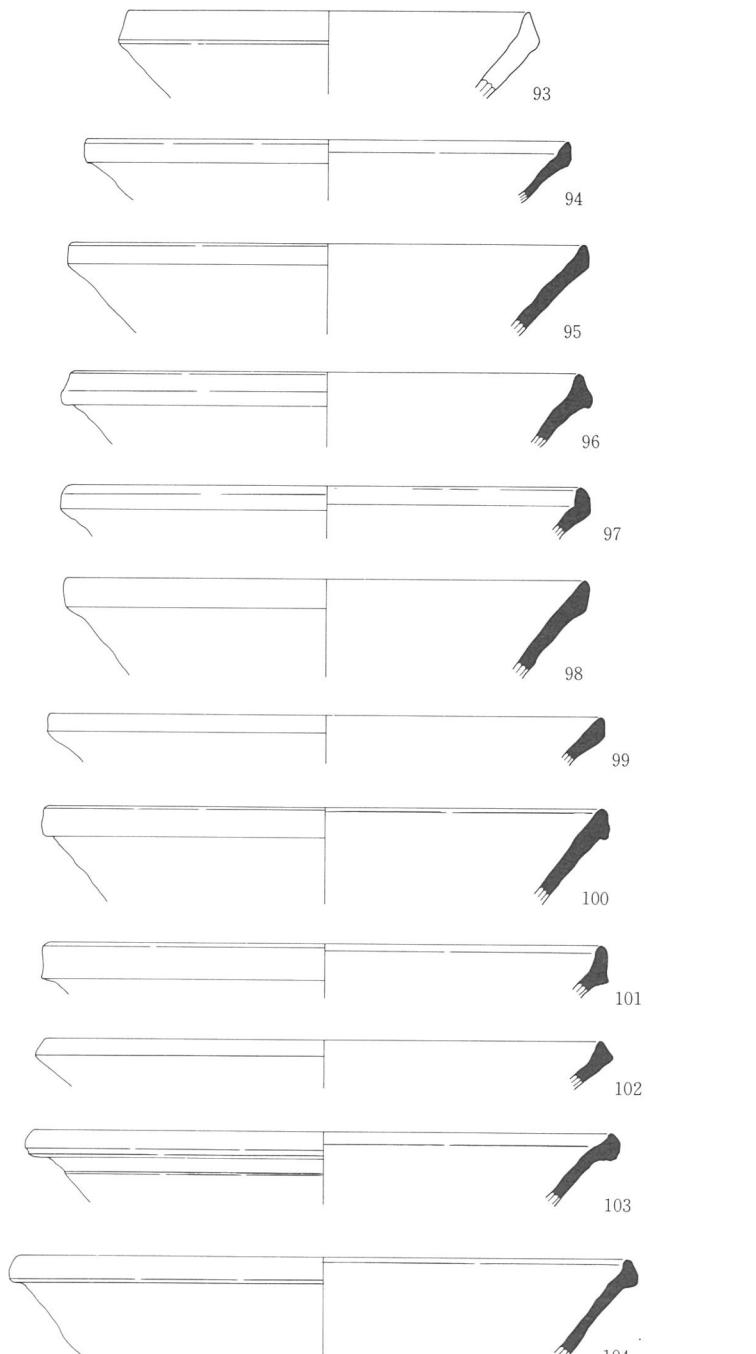


第6図 遺物包含層出土遺物実測図(1)



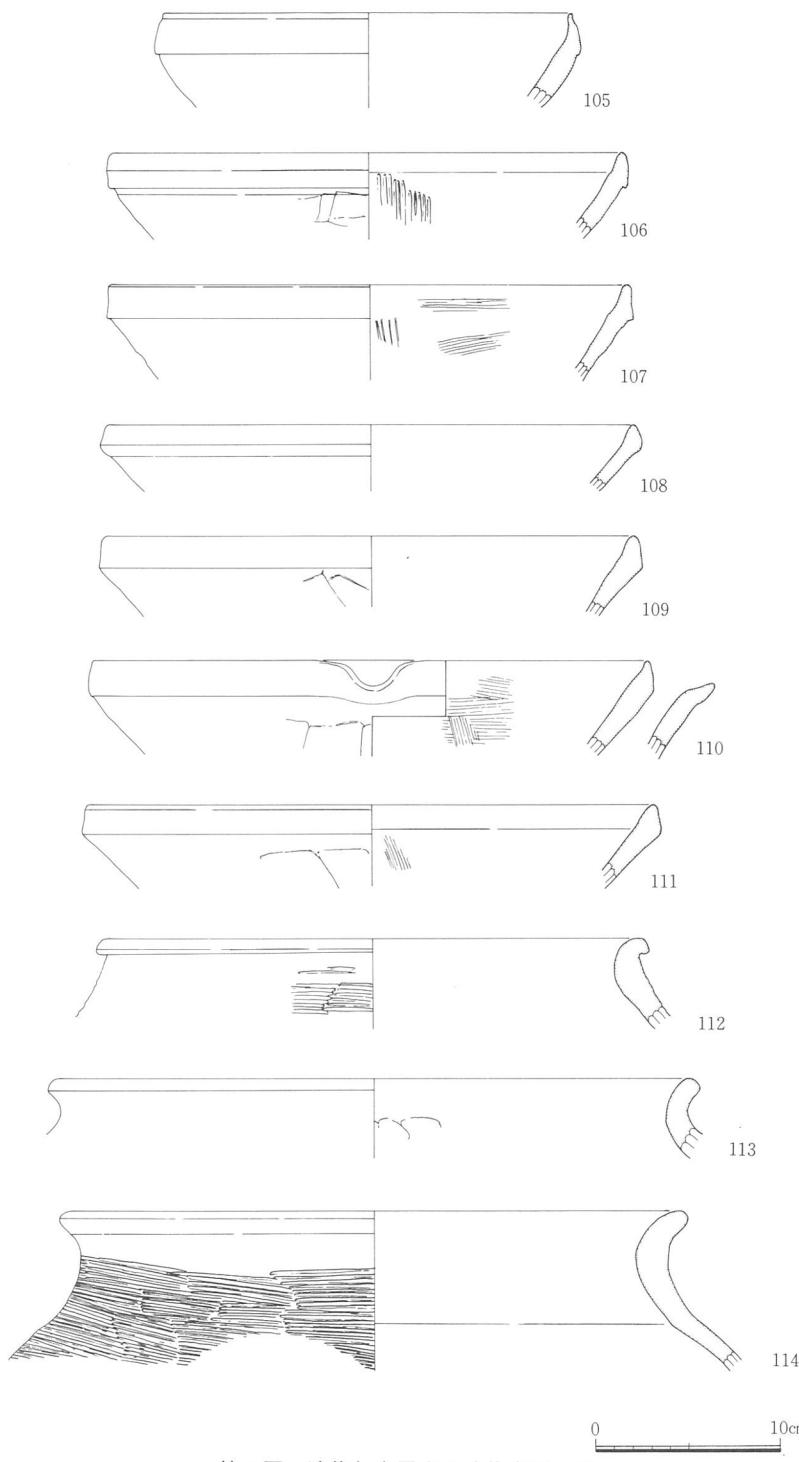
0 10cm

第7図 遺物包含層出土遺物実測図(2)



0 10cm

第8図 遺物包含層出土遺物実測図(3)



第9図 遺物包含層出土遺物実測図(4)

た、87では体部外面にヘラケズリを施す。

#### 鉢 (93~111)

土師質、須恵質、瓦質の3種類ある。このうち須恵質のものは、口縁部破片ばかりであるが、形状は様々で、口縁端部が外下方に肥厚し断面三角形をなすもの、口縁部が外反したのち上方へ屈曲するもの、口縁端部で外下方には肥厚せず直線的に体部につづくものがみられる。調整は口縁部内、外面ともヨコナデを施す。一方、瓦質のものは、口縁部が内弯気味にたちあがり端部をつまみあげたもの、口縁端部で外下方に突出するもの、口縁端部が肥厚し断面三角形をなすもの等の形態があり、調整は口縁部にヨコナデ、体部内面はナデ、ハケメ調整がみられ、体部外面はヘラケズリが施される。なお体部内面に擂目のみられるものもある。

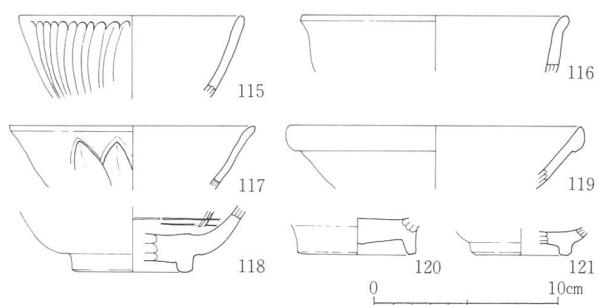
#### 甕 (112~114)

112~114はいずれも瓦質の甕である。112は口縁部が短く外方へ曲げられ玉縁状をなし、体部外面に平行タタキを施す。113は口縁部が「く」字状に外方へ折り曲げられ端部は丸くおわる。114は直立する頸部に短く上外方に折れ曲がる口縁部をもち、体部外面に平行タタキを施す。これらはいずれも15世紀に属するものと思われる。

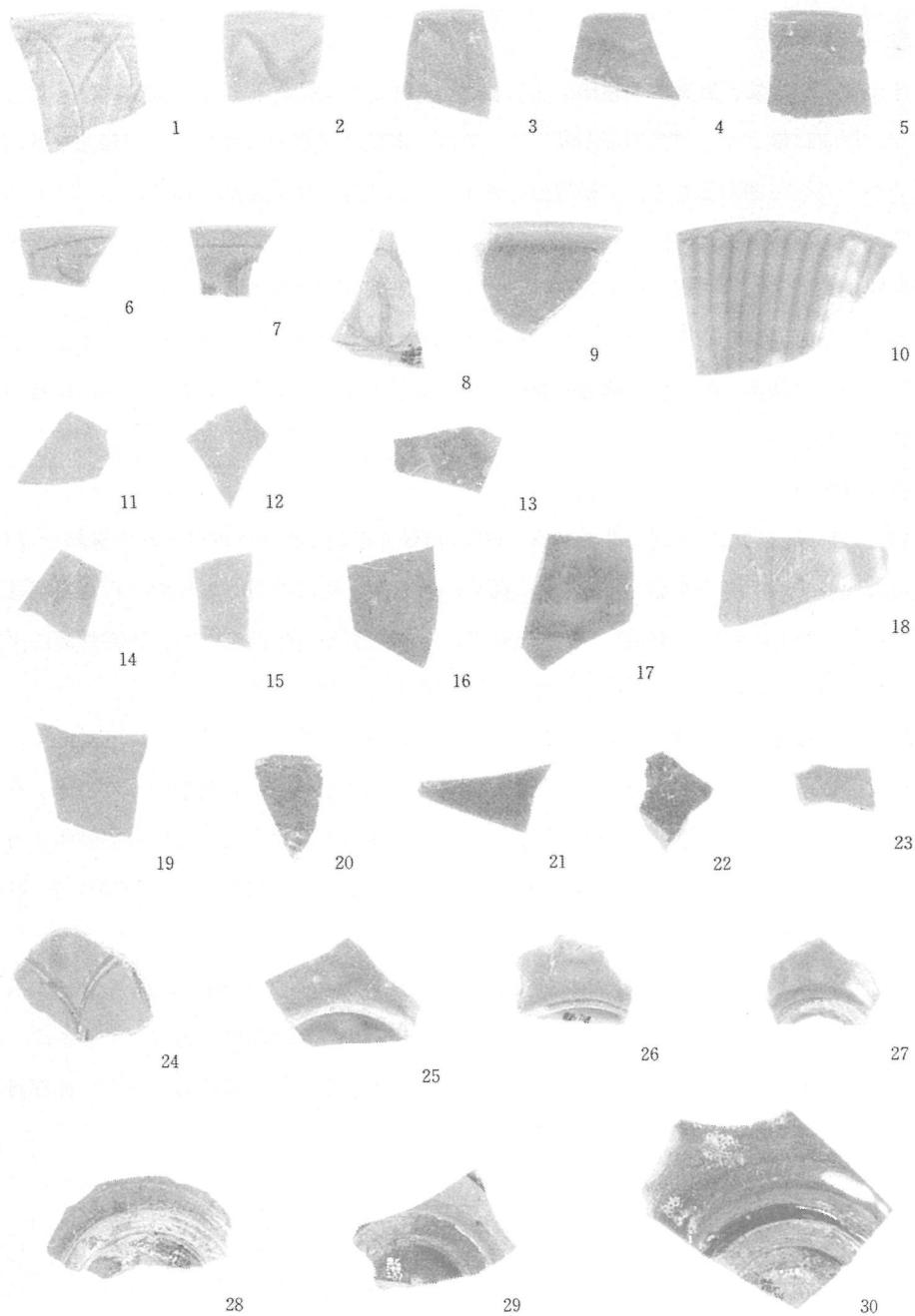
#### 輸入青・白磁 (115~121, 第11~13図)

第10図に示したように、図化したものは7点であるが、遺物包含層中より出土した輸入青・白磁はすべて、第11~13図の写真挿図中に掲載した。以下これに沿って説明する。なお、文章中で使用する青・白磁の分類は、とくにことわらない限り、すべて横田賢次郎・森田勉氏の分類<sup>(2)</sup>に拠っている。

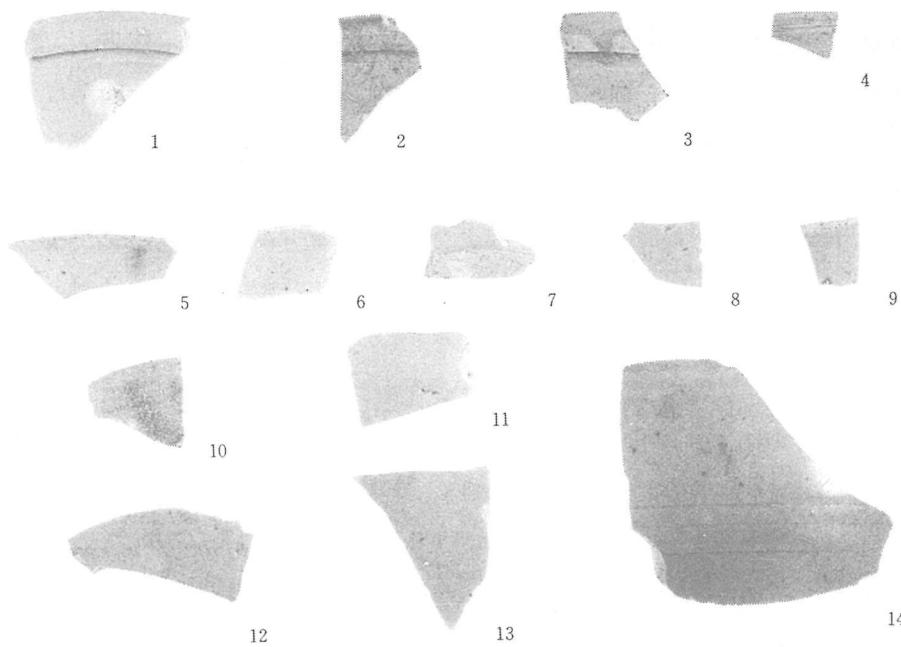
遺物包含層中より出土した中国製青磁は全部で30点であり、これらはすべて碗である(第11図)。1~10は口縁部、11~24は体部、25~30は高台の破片である。1~4は、体部外面に鎧蓮弁文を施す龍泉窯系の青磁碗である。I-5 b類に属する。一方、体部破片のうち11~15・18もI-5 b類に属する鎧蓮弁文を有する龍泉窯系の青磁碗である。5は体部内・外面無文の龍泉窯系の青磁碗であり、I-1類に属する。南宋代の12世紀後半~13世紀のものである。一方、6の体部破



第10図 遺物包含層出土遺物実測図(5)



第11図 遺物包含層出土青磁写真



第12図 遺物包含層出土白磁写真(1)

片も、無文のものでI-1類に属する。6は龍泉窯系の雷文碗であり、14世紀後半～15世紀前半のものである。7・8は龍泉窯系青磁碗である。体部内面に画花文を施している。このうち8は、南宋代の12世紀後半～13世紀初めのものである。また体部破片の30も、龍泉窯系の画花文を施した碗であり、年代も8と同様、12世紀後半～13世紀初めに属するものである。9は口縁部が短く外反し、端部は丸くおわっている。上田秀夫氏の分類のD類に相当するものであり、底部の形態は古い時期に近いものと思われる。明代の14世紀～15世紀前半のものである。10は、体部外面に鎬のない線描による細かい蓮弁文を施す青磁碗であり、時期は明代の15世紀～16世紀前半にあ



第13図 遺物包含層出土白磁写真(2)

たる。24は同安窯系のもので、体部内面に櫛描文を有する。南宋代の12世紀後半～13世紀にかけてのものである。26・27は、III類に属する龍泉窯系青磁碗で、全面施釉され、釉は青味がかった色を呈し、畳付のみ釉をかきとり、釉端は褐色を呈している。南宋代のものである。28の高台破片は、断面四角形を呈し、畠付と高台内部は露胎である。龍泉窯系のものであり、器壁の薄いことより13世紀代のものと考えられる。上述のもの以外も、すべて龍泉窯系のものであり、30個体のうち、24が同安窯系のものである以外、すべて龍泉窯系のものである。

白磁は15点出土している（第12・13図）。器種は碗、皿、四耳壺である。1～4は玉縁口縁の碗である。このうち1～3はIV類に属するもので、比較的大きな玉縁を有するものである。一方、4は小さい玉縁をもつもので、釉は黄味がかっている。12世紀の限られた時期のものである。15の碗高台部破片は、外反する口縁をもつ。V類に属するものである。11世紀末～12世紀のものである。5・6は皿で、5は外反する口縁をもち、IV類に属する。6は口縁部が口禿になったもので、IX類に属する。12～14は四耳壺の破片である。すべて南宋代のものである。その他、7・8は碗、9は碗あるいは皿、10・11は器種不明であるが、すべて南宋代のものである。

捕図 No.	層位 地 区	器 形 器 種	(内面) 色 調 (外面) (断面)	形 態・技 法 の 特 徴	時 期	生産窯	実測図
第11図 1	第3・4層 F18NE	青磁 碗	7.5G Y7/1 (明緑灰) 7.5G Y7/1 (明緑灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鏽蓮弁文を施す。口縁端部はやや外上方へのびる。釉全体に貫入が多い。	13C中心	龍泉窯系	第10図 117
第11図 2	第3・4層 F18EG	青磁 碗	5 G Y6/1 (オリーブ灰) 5 G Y6/1 (オリーブ灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鏽蓮弁文を施す。口縁端部は丸くおわる。		龍泉窯系	
第11図 3	第4層 F08EA	青磁 碗	5 G Y6/1 (オリーブ灰) 5 G Y6/1 (オリーブ灰) N7/0 (灰白)	体部外面に鏽蓮弁文を施す。口縁端部は丸くおわる。		龍泉窯系	
第11図 4	第3層 F13KD	青磁 碗	7.5G Y5/2 (灰オリーブ) 2.5G Y5/1 (オリーブ灰) N7/0 (灰白)	体部外面に鏽蓮弁文を施す。口縁端部は薄くひきあげる。		龍泉窯系	
第11図 5	第3層 F08IB	青磁 碗	10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y7/1 (灰白)	体部内外面とも無文。	南宋 12C後～13C	龍泉窯系	
第11図 6	第3層 F13LC	青磁 碗	10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y8/1 (灰白)	体部外面に雷文を有する。口縁端部は丸くおわる。	14C後～15C前	龍泉窯系	
第11図 7	第3層 F08EB	青磁 碗	7.5Y6/2 (灰オリーブ) 7.5Y6/2 (灰オリーブ) 7.5Y7/1 (灰白)	体部内面に画華文を施す。口縁端部はやや外反する。		龍泉窯系	

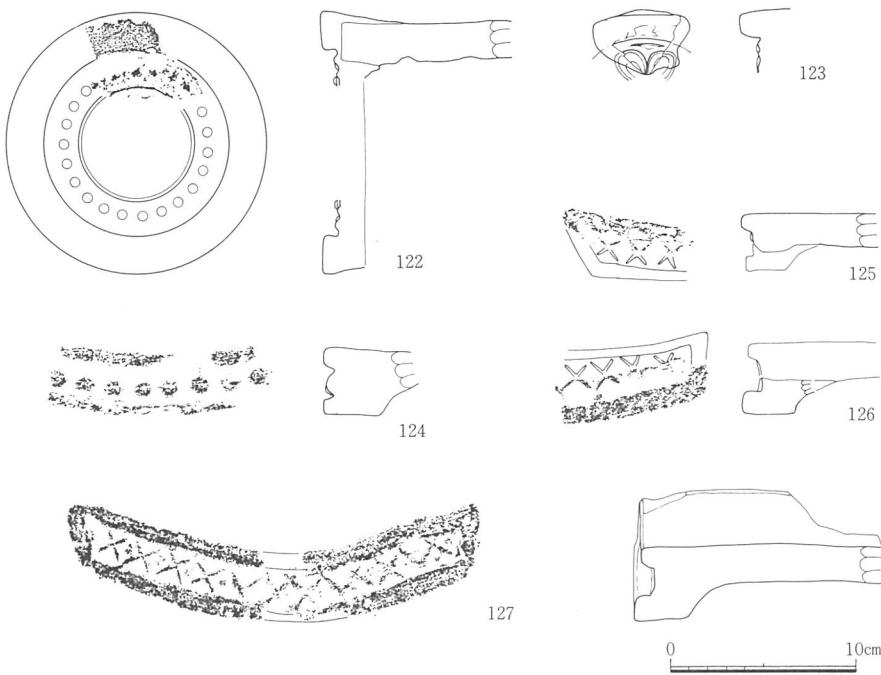
第1表 遺物包含層出土輸入磁器観察表(1)

掲図 No.	層位 地区	器形 器種	(内面) 色調 (外面) (断面)	形態・技法の特徴	時 期	生産窯	実測図
第11図 8	第3層 F08Q A	青磁 碗	5 G Y7/1 (明オリーブ灰) 5 G Y7/1 (明オリーブ灰) N8/0 (灰白)	体部内面に画花文を施す。口縁は直線的 にのび端部は丸くおわる。	南宋 12C後~13C初		
第11図 9	第3層 F13 I F	青磁 碗	10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y6/2 (オリーブ灰) N8/0 (灰白)	口縁外反し、端部は丸い。器壁は厚い。	明 14C~15C前		第10図 116
第11図 10	第3層 F18 K E	青磁 碗	10Y R7/2 (灰白) 10Y6/2 (オリーブ灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鎬のない線描による細かい蓮 弁文を施す。口縁端部は丸くおわる。	明 15C~16C前		第10図 115
第11図 11	第4層 F08E A	青磁 碗	7.5G Y7/1 (明緑灰) 7.5G Y7/1 (明緑灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。		龍泉窯系	
第11図 12	第3層 F08 H A	青磁 碗	5 G Y6/1 (オリーブ灰) 5 G Y6/1 (オリーブ灰) 10Y8/1 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。		龍泉窯系	
第11図 13	第4層 F08G A	青磁 碗	10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y6/2 (オリーブ灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。		龍泉窯系	
第11図 14	I 区 西侧溝	青磁 碗	10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y6/2 (オリーブ灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。		龍泉窯系	
第11図 15	第3層 F13素MC	青磁 碗	7.5G Y7/1 (明緑灰) 7.5G Y7/1 (明緑灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。		龍泉窯系	
第11図 16	第2層 F08Q B	青磁 碗	7.5G Y6/2 (灰オリーブ) 7.5G Y6/2 (灰オリーブ) 10Y8/1 (灰白)	体部内外面とも無文。		龍泉窯系	
第11図 17	第3・4層 F18B E	青磁 碗	7.5G Y6/1 (緑灰) 7.5G Y6/1 (緑灰) N7/0 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。	南宋	龍泉窯系	
第11図 18	第3層 F08 X A	青磁 碗	5 G Y7/1 (明オリーブ灰) 5 G Y7/1 (明オリーブ灰) N8/0 (灰白)	体部外面に鎬蓮弁文を施す。		龍泉窯系	
第11図 19	第3層 F08 K A	青磁 碗	10Y7/2 (灰白) 10Y7/2 (灰白) N8/0 (灰白)	釉全体に貫入が多い	宋が明	龍泉窯系	
第11図 20	第4図 F08 H C	青磁 碗	7.5Y5/2 (灰オリーブ) 7.5Y5/2 (灰オリーブ) N8/0 (灰白)			龍泉窯系	
第11図 21	第2層 F08 O D	青磁 碗	2.5Y4/6 (オリーブ褐) 2.5Y4/6 (オリーブ褐) 7.5Y R6/3 (にぶい褐)			龍泉窯系	
第11図 22	第3・4層 F18 O D	青磁 碗	10Y5/2 (オリーブ灰) 10Y5/2 (オリーブ灰) N7/0 (灰白)			龍泉窯系	
第11図 23	第3層 F08 F A	青磁 碗	2.5G Y6/1 (オリーブ灰) 2.5G Y6/1 (オリーブ灰) 5 G Y8/1 (灰白)			龍泉窯系	
第11図 24	第2層 F08 Q B	青磁 碗	2.5G Y5/1 (オリーブ灰) 2.5G Y5/1 (オリーブ灰) N7/0 (灰白)	体部内面に櫛描文を施す。	南宋 12C後~13C	同安窯系	
第11図 25	第4層 F07 I X	青磁 碗	2.5G Y5/1 (オリーブ灰) 2.5G Y5/1 (オリーブ灰) N7/0 (灰白)	細く尖る高台をもつ。全面施釉され疊付 の釉をかきとる。	南宋	龍泉窯系	
第11図 26	第4層 F08 O D	青磁 碗	10G7/1 (明緑灰) 10G7/1 (明緑灰) N8/0 (灰白)	高台は細く尖る。全面施釉され疊付のみ 釉をかきとつており釉端は褐色を呈する。	南宋	龍泉窯系	

第2表 遺物包含層出土輸入磁器観察表(2)

挿図 No.	層位 地区	器形 器種	(内面) 色調 (外面) (断面)	形態・技法の特徴	時 期	生産窯	実測図
第11図 27	第3・4層 F18L E	青磁 碗	7.5Y6/1 (オリーブ灰) 7.5Y6/1 (オリーブ灰) N8/0 (灰白)	高台は細く尖る。全面施釉され疊付のみ 釉をかきとつており釉端は褐色を呈する。	南宋	龍泉窯系	
第11図 28	第3層 F13MD	青磁 碗	10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y6/2 (オリーブ灰) 10Y8/1 (灰白)	高台断面は四角形を呈する。底部は薄い。 疊付と高台内部は露胎。	南宋 13C	龍泉窯系	第10図 121
第11図 29	表土 IV区	青磁 碗	7.5G Y6/1 (緑灰) 2.5Y R3/2 (暗赤褐) 7.5Y7/1 (灰白)	高台断面は四角形を呈する。高台内部・ 高台外側1.5cmの範囲は露胎	南宋	龍泉窯系	
第11図 30	第3層 F18D F	青磁 碗	10Y5/2 (オリーブ灰) 10Y5/2 (オリーブ灰) N7/0 (灰白)	体部内面に画花文を施す。全面施釉され る。底部は厚く、高台断面は四角形を呈 する。		龍泉窯系	第10図 118
第12図 1	第3・4層 F18L F	白磁 碗	10Y8/1 (灰白) 10Y8/1 (灰白) 10Y8/1 (灰白)	口縁に玉縁をもつ。			第10図 119
第12図 2	第3層(床 土下)3区	白磁 碗	5Y8/2 (灰白) 5Y8/2 (灰白) 5Y8/1 (灰白)	口縁に玉縁をもつ。			
第12図 3	第3・4層 F18MF	白磁 碗	5Y8/2 (灰白) 5Y8/2 (灰白) 5Y8/1 (灰白)	口縁に玉縁をもつ。			
第12図 4	第3層 F18MF	白磁 碗	5Y8/2 (灰白) 5Y8/2 (灰白) 5Y8/1 (灰白)	口縁端部に小さな玉縁をもつ。	12C		
第12図 5	第4層 F07FY	白磁 碗	2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) 2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) 2.5G Y7/1 (明オリーブ灰)	口縁端部は外反する。			
第12図 6	第3・4層 F18KE	白磁 碗	10Y8/1 (灰白) 10Y8/1 (灰白) N8/0 (灰白)	口縁端部が口禿			
第12図 7	第3層 F08QA	白磁 碗	10Y8/1 (灰白) 10Y8/1 (灰白) 10Y8/1 (灰白)		南宋		
第12図 8	第3層 F13BB	白磁 碗	2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) N8/0 (灰白) N8/0 (灰白)		南宋		
第12図 9	第3・4層 F18FF	白磁 碗か皿	7.5Y7/1 (灰白) 7.5Y7/1 (灰白) N8/0 (灰白)		南宋		
第12図 10	第3層 F07QY	白磁 碗か皿	5Y7/2 (灰白) 5Y7/2 (灰白) 5Y8/1 (灰白)	釉全体に貫入が多い。	南宋		
第12図 11	第3層 F08IA	白磁 不明	2.5G Y8/1 (灰白) 2.5G Y8/1 (灰白) 2.5G Y8/1 (灰白)		南宋		
第12図 12	第3・4層 F18GE	白磁 四耳臺	2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) 2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) N8/0 (灰白)		南宋		
第12図 13	第4層 F07HX	白磁 四耳臺	2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) 2.5G Y7/1 (明オリーブ灰) N8/0 (灰白)		南宋		
第12図 14	第3・4層 F18HF	白磁 四耳臺	10Y7/1 (灰白) 2.5G Y8/1 (灰白) N8/0 (灰白)	体部内面に施釉されない部分がある。	南宋 11C~13C		
第13図 15	第3層 F08XA	白磁 碗	2.5G Y8/1 (灰白) 10Y8/1 (灰白) N8/0 (灰白)	細く直立した高台。高台部及び高台内部 は露胎。			第10図 120

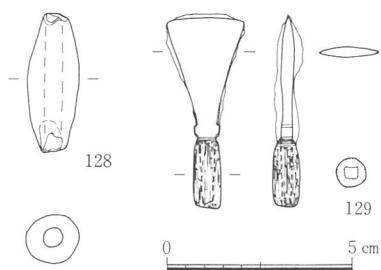
第3表 遺物包含層出土輸入磁器観察表(3)



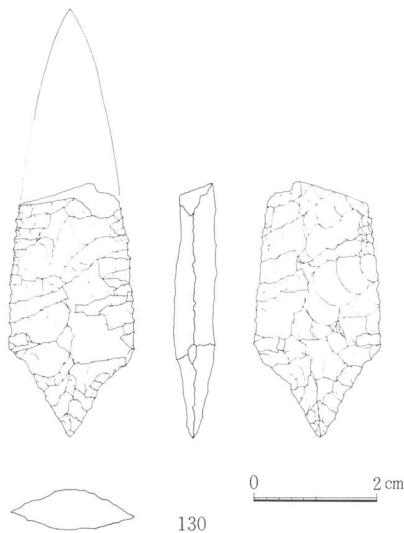
第14図 遺物包含層出土遺物実測図(6)

### 瓦

122は軒丸瓦の破片で瓦当部は外区の一部が残存している。外区外縁は直立縁で、外区内縁には珠文帯が巡る。丸瓦部は凹面に布目痕跡が残っている。なお残存長は10.4cmである。123も軒丸瓦の瓦当部の破片である。外区外縁は直立縁で幅は1.5cmである。内区の文様は、破片がごく一部分であり断定はできないが、蓮華文である可能性が高いと思われる。124～127はすべて軒平瓦であり、124は両端部が欠損している。内区の文様は珠文である。頸は曲線頸を呈し、頸の平坦部の長さは2.5cmである。125は瓦当左端部の上外区及び内区上半部の破片である。内区の文様は幾何学文である。なお残存長は7.3cmである。126は瓦当右端部の下外区及び内区下半部の破片である。内区の文様は幾何学文である。頸は曲線頸を呈し、頸の平坦部の長さは2.9cmである。なお125と126は、同一グリッドから出土すること、内区文様が同一であること、そして焼成も酷似していることから、同一個体の可能性が高い。127は幅22.4cm、残存長13.5cmをはかる。内区には125・126と同じ幾何学文を配している。頸は曲線頸であり、頸の平坦部の長さは3.0cmをはかる。以上の瓦は、文様、頸の形態等からみて、鎌倉時代のものであると思われる。



第15図 遺物包含層出土遺物実測図(7)



第16図 遺物包含層出土遺物実測図(8)

### 土錘 (128)

IV区中央部やや西寄りのF 18 H D地区より出土した。全長4.0cmをはかる管状土錘である。横断面は円形を呈しており、西端は細く、中央部にむかってゆるやかにふくらんでいく紡錘形を呈している。両端部の直径はいずれも0.8cmであり、中央部の最大径は1.5cmをはかる。また体部を貫通する管の直径は0.6cmをはかる。なお色調は内・外面ともに2.5Y R 6/6橙色を呈する。焼成は良好である。

### 鉄鎌 (129)

I区南半部の東端に位置するF 07 Q Y地区より出土した。斧箭式の鉄鎌である。全長は5.1cmをはかる。鎌身部の長さは3.0cmをはかり、鎌身の最大幅は先端にあって2.1cmをはかる。また鎌身部の横断面はレンズ状を呈しており、厚さは最大で0.35cmである。茎部は長さ2.1cmをはかる。断面は0.4cm×0.4cmの方形である。また鎌身の基部の両側面に棘を有する。なお、茎部には木質が遺存している。

(吉村)

### 有茎尖頭器 (130)

IV区北東隅に位置するF 13 Y G地区において第5層（整地層）より出土した有茎尖頭器である。サヌカイト製でやや風化が進んでいる。先端約半分が古くに欠損しているものの、残存部分の残りは良好である。推定全長約9cm（残存長5.3cm）、基部幅2.5cm、基部厚さ0.9cmをはかる。調整は丁寧なもので並列剥離がみられる。次に調整の順序を読み取ってみると、図A面（左側）がB面（右側）の後で剥離整形された様子であり、A面の両縁には細剥離が観察できる。これによって縁が鋸歯状となる部分がある。並列剥離はA・B両面とも、向かって左側が右側に先行しているため、身部中央の稜線は左側に片寄る傾向がある。剥離の順序は基部から先端部に向かってなされているが、身部調整後に基部が整形されている。

(岸本)

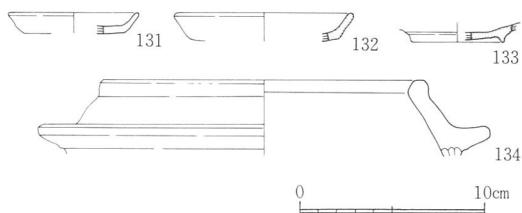
### 整地層出土土器（131～134）

前項で述べたようにⅣ区北端には、  
地山と第3・4層の間に第5層（整地  
層）が残存する。また、後述するが、  
III区南半部のF13 I E・I F・J E・  
J Fには、地山上に整地層が存在し、  
それぞれ微量の土器を検出した。ここではその遺物について述べていきたい。

第17図131～133はⅣ区北端の第5層より出土したものである。131は土師皿で、口縁部  
は外上方に立ち上がり、底部は平坦である。器体は磨耗が激しい。復元口径は7.1cmである。  
132は瓦器皿である。残存率5%ほどの口縁部の破片である。口縁部は外上方にたち  
あがる。底部は平坦になるものと思われる。調整は内・外面ともナデ調整を施す。133は  
瓦器碗である。高台部付近の破片であり、高台は断面形が三角形を呈しており、高台径は  
5.1cmをはかる。器体は磨耗が激しい。

134はIII区F13 I E地区の整地層から出土している。土師質の羽釜で口縁部から鍔にかけ  
ての破片である。口縁はやや内傾気味にたちあがり、端部は丸く肥厚している。内・外  
面ともにナデ調整を施している。

（吉村）



第17図 遺物包含層出土遺物実測図(9)

### 註

- (1) 菅原正明 「畿内における土釜の生産と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念  
論文集 同朋舎 1983
- (2) 横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類を中心として—」『九州歴  
史資料館研究論集』4 1978
- (3) 上田秀夫 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 1982

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 1 I区

I区は、全調査区の北側約半分を占めている。層位的には水田耕作土、床土、遺物包含層、地山の順に堆積している。この層序は調査区全体に共通するものである。表土下約60cmで地山面に達し、遺物包含層は約20cmほどの厚さをもって堆積しているが、南側ほど層厚を減ずる。

I区は全体的にみて遺構の分布は希薄である。検出された遺構の主体をなすものは、耕作時の鋤溝で、他に若干の土坑、ピット類が認められる。鋤溝は、全て北東～南西方向に走るもので、南側の各調査区で検出された鋤溝と同方向をとっている。又、これらの鋤溝は、現在の竪方向とも一致している。各鋤溝は、ほぼ一定の間隔をもって並行して検出された。しかし一部には多数の鋤溝が密接している部分がみられた。この部分は、地山面が段差をもつ部分に相当し、ここで耕地も段差を有していたと考えられる。恐らく、この密接する溝は、上段の耕地を徐々に浸食し、下段の耕地を拡大した際に掘られたものと思われる。各鋤溝内には、灰褐色～黄褐色の粘質シルトが堆積している。埋土内からは、若干の遺物が出土しているが、図示し得るものは極めて少ない。実測図に示したのは046-O S出土の土師質羽釜（第20図7）である。他の鋤溝の多くからも土器類が出土しているが、極細片ばかりである。又、遺物の多くは瓦器碗である。

鋤溝以外に検出された遺構として土坑・ピットがある。土坑は何れも浅いもので、遺物も非常に少ない。この内のいくつかについて簡単に説明を加える。

##### 002-O O

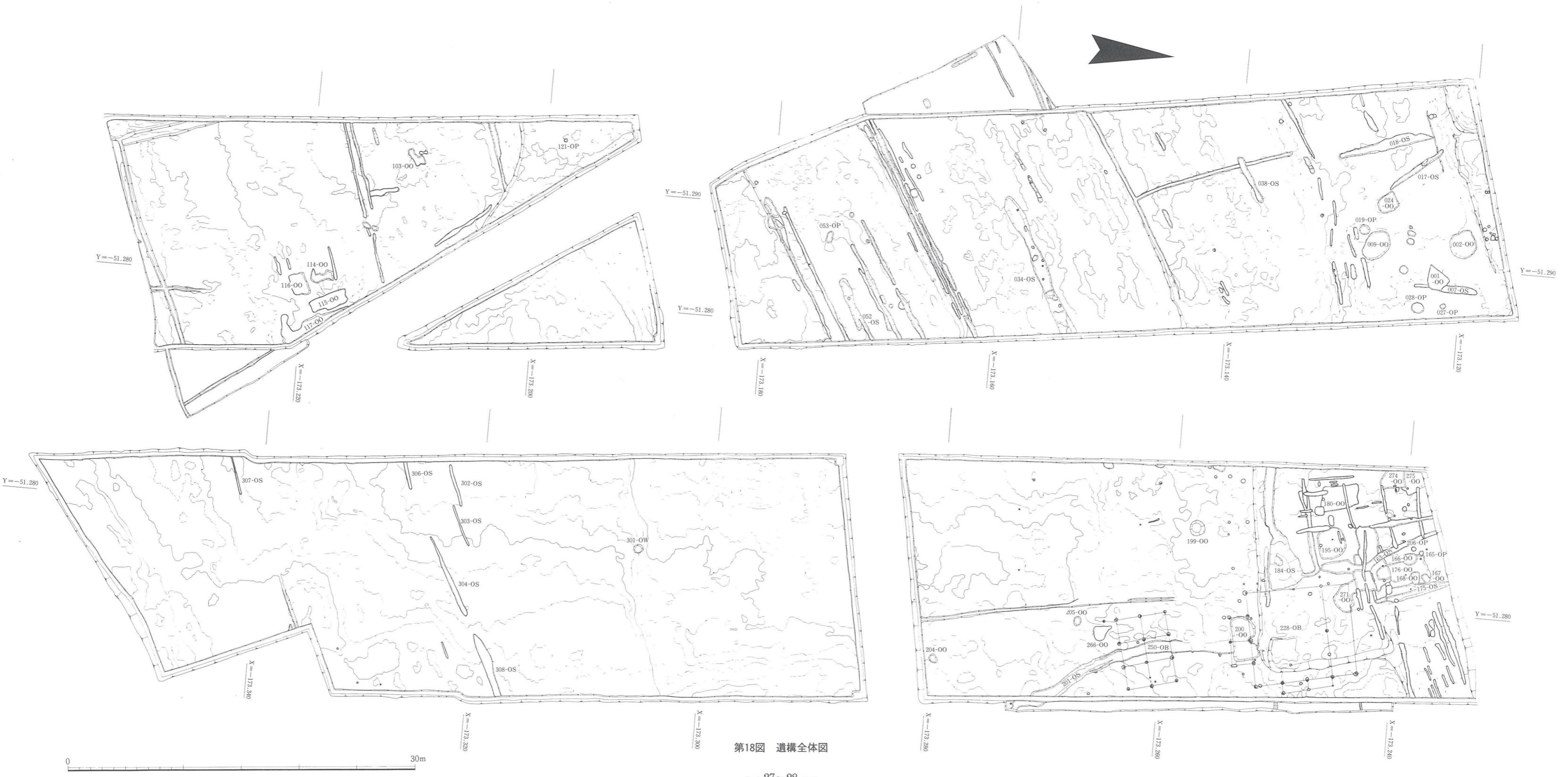
直径約2.4cmを計測するほぼ円形の土坑で、深さは10cmほどの非常に浅いもので、皿状を呈している。埋土からは、若干の土師器、瓦器等を検出したにすぎない。

##### 009-O O

長軸2.9m、短軸2.0mを計る橢円形を呈する土坑で、深さは15cmほどである。底面は平坦で凹凸はみられない。埋土には褐灰色の砂質土が堆積していた。埋土内からは、土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器などが出土したが、何れも細片ばかりである。

##### 019-O P

直径90cmのほぼ円形を呈し、深さは、15cmほどを計る。このピットの埋土は2層に分け



第18図 遺構全体図

ることができる。上層は褐色（10YR4/6）の粘質シルトで、約10cmの厚さをもっている。下層はにぶい黄褐色（10YR5/4）の粘質シルトで、中に多量の炭が混入している。ピット壁面は、焼成による熱を受け明赤褐色（5YR5/8）を呈している。又、この熱により壁面は硬質に焼きてしまっている。状況からみてピット内で火を燃した点は疑いないが、その目的については不明である。中から土師器及び瓦器の細片が数点づつ検出された。

#### 024-O O

長軸1.8m、短軸1.5mをはかる隅丸長方形の土坑である。深さは12cmほどで、底面は平坦である。埋土は褐灰色（10YR6/1）粘質シルトが堆積している。中からは瓦器及び土師器の細片が極少量出土したのみである。

#### 017-O S

長さ5.6m、幅50cmほどを計る浅い溝で、断面はU字形を呈する。底面はほぼ平坦であるが北側にピットが1つ掘られている。埋土は灰黄褐色（10YR5/2）粘質シルトである。遺物は瓦器及び土師器が少量出土している。

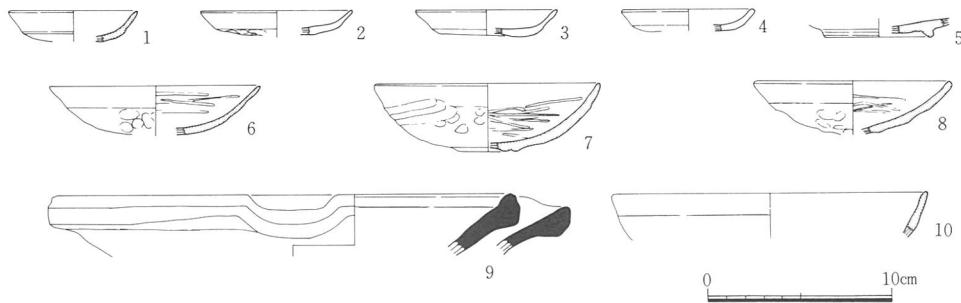
#### 018-O S

長さ8.2m、最大幅1.0mを計る浅い溝で、底面は平坦である。埋土は褐灰色（10YR6/1）粘質シルトである。遺物は瓦器及び土師器が少量出土したにすぎない。

I区では他に若干の土坑やピットが検出されたが、何れも浅い落ち込み程度のものが多い。又、これらの遺構の集中する部分をみるとI区北端にかたまることが判る。この部分は一番低い段部分で、これより一段上がると鋤溝以外全く遺構が認められなくなる。恐らく後の耕地開発に際して削平を受けているものと思われる。

## 2 II区

2本の農道に挟まれた約130m<sup>2</sup>ほどの部分である。基本的な層序は他地区と全く同じである。水田耕作土・床土・遺物包含層・地山の順に堆積している。しかしII区では、床土に相当する土層が、他区に比べて約40cmと厚く、分層が可能であった。この層は全体に黄褐色系の粘質土であるが、ほぼその中間部分に層厚10cmほどの黄灰色を呈する粘質土が挟まれている。この土層は、耕作土と考えられ、現水田下に旧水田が存在することが判明した。遺物包含層は、層厚約20cmほどを計り、一定した堆積を示している。この遺物包含層中より瓦器・土師器等が出土したが量的にはあまり多くない。



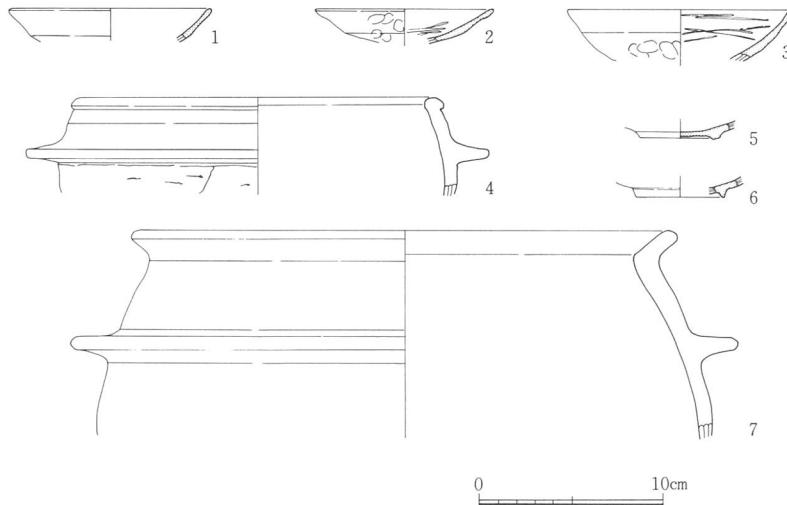
第19図 各遺構出土遺物実測図(1)  
 (037-O P 1, 177-O O 2, 195-O O 3~6・9,  
 271-O O 7, 178-O O 8, 116-O O 10)

挿図 No. 図版	層位 地 区	器形 器種	1 法量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外側) (断面)	残存 率	備 考
第19図 1	F08 P O	瓦器 皿	口径 (7.0) 器高 (1.6) —	口縁部、内面横ナデ	0.5mm以下の砂 粒を含む	不良	10Y R7/6 (明黄褐色) 10Y R7/6 (明黄褐色) 10Y R7/6 (明黄褐色)	10%	
第19図 2	F13 K D	土師器 皿	口径 (8.2) 器高 (1.3) —	口縁部、内面横ナデ、外面 指オサエ	0.5mm以下の砂 粒を少し含む	良好	7.5Y 8/2 (灰白色) 7.5Y 8/2 (灰白色) 7.5Y 8/2 (灰白色)	20%	
第19図 3	F13 L C	土師器 皿	口径 (7.7) 器高 1.4 —	口縁部横ナデ、内面、外面 摩滅の為調整不明	0.5mm以下の砂 粒を含む	不良	2.5Y R7/4 (淡赤橙色) 2.5Y R7/4 (淡赤橙色) 2.5Y R7/4 (淡赤橙色)	20%	
第19図 4	F13 L C	土師器 皿	口径 (7.2) 器高 1.15 —	全体に摩滅の為調整不明	2.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好	10Y R5/1 (褐灰色) 5 Y R6/3 (にぶい橙色) 5 Y R6/3 (にぶい橙色)	10%	
第19図 5	F13 L C	瓦器 椀	— 器高 (1.0) 高台径 (5.7)	全体に摩滅の為調整不明	1.0~2.0mmの砂 礫を多く含む	不良	2.5Y 8/1 (灰白色) 5 Y 8/2 (灰白色) 5 Y 8/2 (灰白色)	10%	
第19図 6	F13 L C	瓦器 椀	口径 (11.4) 器高 (2.6) —	口縁部横ナデ内面ヘラミガ キ外面指オサエ	0.5mm以下の砂 粒を含む	不良	7.5Y 8/1 (灰白色) 7.5Y 5/1 (灰色) 7.5Y 8/1 (灰白色)	20%	
第19図 7 図版23	F13 K D	瓦器 椀	口径 (12.2) 器高 3.65 高台径 (3.0)	口縁部横ナデ、内面ナデ→ヘ ラミガキ、外面指オサエ	3.0mm大の灰色 砂礫を含む	良好	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) 10Y 8/1 (灰白色)	30%	
第19図 8	F13 K C	瓦器 椀	口径 (10.8) 器高 2.9 —	口縁部横ナデ内面ナデ→ヘ ラミガキ、外面指オサエ	2.0mm以下の白・ 灰色砂礫、砂粒 を含む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y 8/1 (灰白色)	10%	
第19図 9 図版23	F13 L C	須恵質 鉢	口径 (25.6) 器高 (3.3) —	口縁部回転ナデ	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好	N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色) N7/0 (灰白色)	5 %	
第19図 10	F13 F E	瓦質 鉢	口径 (17.0) 器高 (2.5) —	全体に摩滅の為調整不明	0.5mm以下の砂 粒を含む	不良	10Y 4/1 (灰色) 10Y 4/1 (灰色) 5 Y 8/2 (灰白色)	5 %	

第4表 037-O P, 177・195・116・271-O O出土遺物観察表

地山面を精査したが、II区については、何らの遺構も検出されなかった。III区北側とレベルに差はみられず、大規模に削平を受けたとは考えにくい。地山面は北西方向に緩傾斜しており、北端で若干段をなすように下がる。この段は、III区にも認められ一連の段落ちになると考へられる。

(木下)



第20図 各遺構出土遺物実測図(2)  
(154-O S 1, 018-O S 2, 163-O S 3・4, 197-O S 5, 308-O S 6, 146-O S 7)

掲 図 版 No.	層 位 地 区	器 形 器 種	法 量 h b	調 整	胎 土	焼 成	(内面) (外面) (断面)	残 存 率	備 考
第20図 1	F 13 K C	瓦器 皿	口径 (11.0) 器高 (1.8) —	口縁部横ナデ	0.5mm以下 の白色砂粒を含む	良好	N2/0 (黒色) N2/0 (黒色) 7.5Y (灰白色)	5%	
第20図 2	F 07 H Y	瓦器 皿	口径 (9.6) 器高 (1.85) —	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	1.0mm以下 の白色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	20%	
第20図 3	F 13 L D	瓦器 椀	口径 (12.2) 器高 (2.7) —	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	0.5mm以下 の砂粒を含む	良好	10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色) 10Y8/1 (灰白色)	10%	
第20図 4 図版23	F 13 K C	土師器 羽釜	口径 (20.2) 器高 (5.2) つば径 (25.0)	つば部～内面横ナデ、外 面粗いケズリ	0.5mm以下 の砂粒を多く含む	良好	2.5Y R6/4 (にぶい橙色) 2.5Y R6/4 (にぶい橙色) 2.5Y R6/4 (にぶい橙色)	10%	
第20図 5	F 13 K E	瓦器 椀	— 器高 (0.9) 高台径 (4.3)	内面ヘラミガキ、高台部は りつけ～横ナデ	0.5mm以下 の砂粒を含む	不良	2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色)	5%	
第20図 6	F 18 E G	瓦器 椀	— 器高 (1.1) 高台径 (4.8)	内面ナデ、高台部はりつけ →横ナデ	0.5mm以下 の砂粒を含む	良好	10Y4/1 (灰色) 10Y4/1 (灰色) 2.5Y8/1 (灰白色)	5%	
第20図 7 図版23	F 08 R C 、Q D	土師器 羽釜	口径 (29.6) 器高 (11.5) つば径 (36.2)	全体に摩滅の為調整不明	5.0mm以下 の白、 灰色砂粒を含む	普通	5 YR4/2 (灰褐色) 5 YR4/2 (灰褐色) 2.5Y7/6 (明黄褐色)	10%	

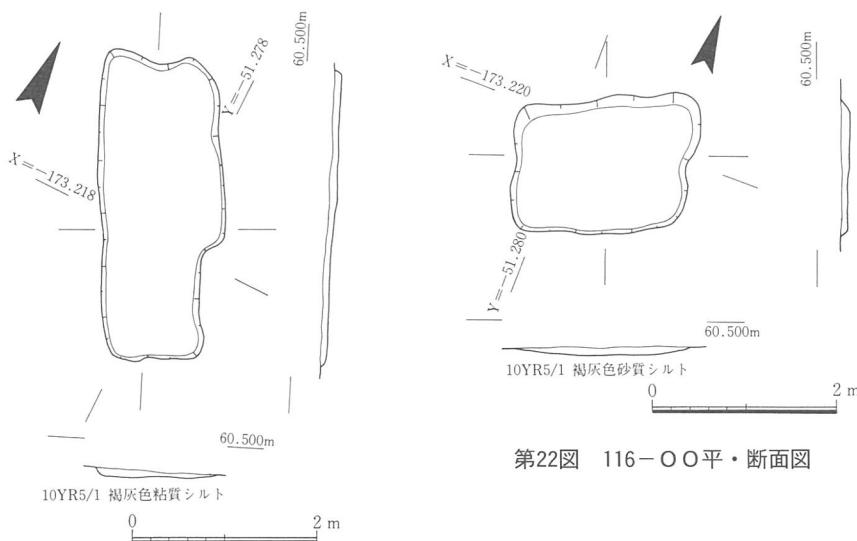
第5表 018・046・154・163・197・308-O S 出土遺物観察表

### 3 III区

調査地全体の中央部であるIII区では、今回もっとも多く遺構を検出した。土層堆積は、後述する一部分を除き、前節の基本層序で述べたように第1・2層の下に第3層遺物包含層があり、その下が地山である。III区北半部では遺構は希薄で、数条の鋤溝の他、土坑、ピットであるが、顕著なものはない。多くの遺構は南半部で検出された。南半部では南東から北西へ伸びる尾根が通っている。この尾根上には掘立柱建物2、溝、井戸などの12世紀後半の遺構があり、この尾根が削平されているIII区南半部の北半ではこれより新しい遺構のみである。なお146-O S付近を境にした北側のF13 I E・I F・J E・J F地区には、地山削平のうち造成された地山混じりの7.5Y R6/8橙色の整地層があり、層中より羽釜等の土器片を検出した。この整地層は旧水田造成にともなうものであると考える。

#### 115-O O

III区北東端で検出した土坑である。南北3.5m、東西1.4mを測り、南北に長い不整形な長方形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは8cmである。埋土は10Y R5/1褐灰色砂質シルトである。出土遺物は、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器の細片である。



第22図 116-O O平・断面図

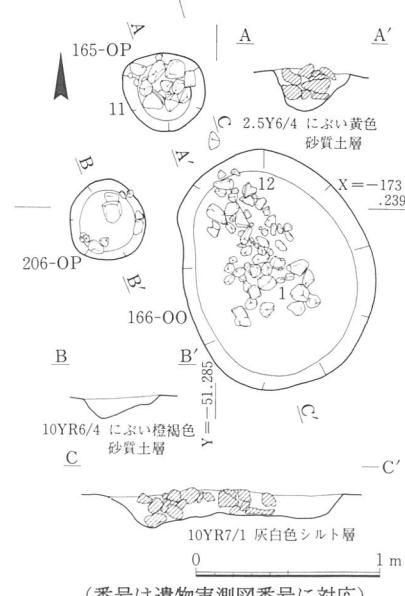
第21図 115-O O平・断面図

### 116-O O

南北1.5m、東西2.1mの東西にやや長い長方形の土坑である。断面形は逆台形を呈し、深さは8cmである。埋土は10Y R5/1褐灰色砂質シルトである。須恵器1、土師器3、瓦器8、瓦質土器2の細片が出土した。

### 165-O P

III区のほぼ中央に位置し、176-O Oの北西端を切っている。径46cmの円形を呈する。断面形はほぼU字形を呈し、深さは22cmである。なお埋土は2.5Y6/4にぶい黄色砂質土だが、ピット内には径約10cmまでの礫が多数充填されていた。出土遺物は、瓦器椀（第25図3）、土師質羽釜（同11）である。なお遺構内に多数の礫が充填されている状況は、近接する206-O P、166・167・168-O Oでも見られた。これらの遺構は出土遺物からみて14世紀代のものである。互いに近接し、類似した様相を示すことから、これら5つの遺構は同時期で、何らかの関連性をもった遺構であると考えられる。

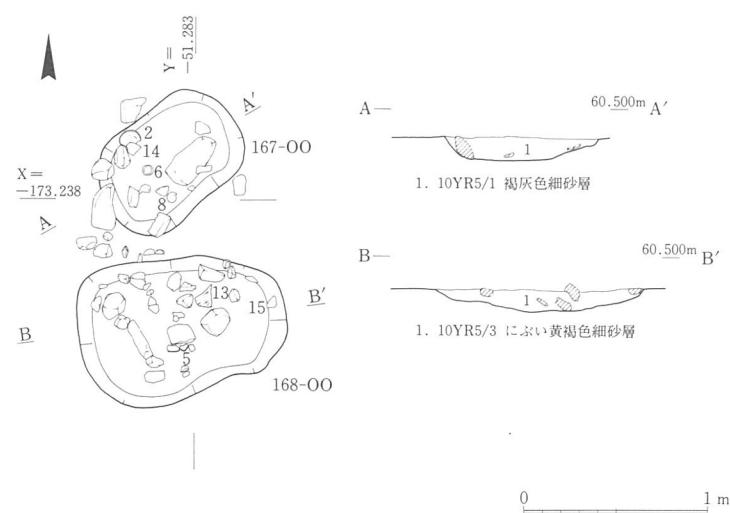


(番号は遺物実測図番号に対応)

第23図 165・206-O P,  
166-O O平・断面図

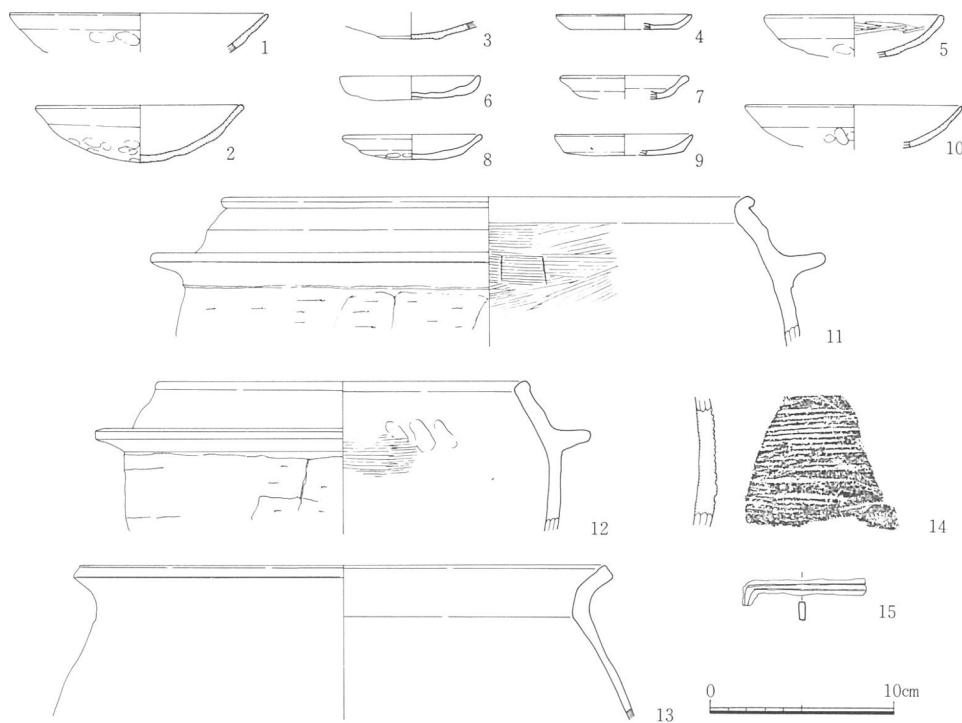
### 206-O P

165-O Pの南側に  
近接する径40cmの円  
形のピットである。  
断面は北側がやや深  
く、南側の傾斜は緩  
い。深さは10cmであ  
る。先述のようにピッ  
ト内に礫が入れられ  
る状況がみられた。  
出土遺物は土師器、  
須恵器片である。



(番号は遺物実測図番号に対応)

第24図 167・168-O O平・断面図



第25図 165-OP, 166~168-OO出土遺物実測図  
(165-OP 3・11, 166-OO 1・12, 167-OO 2・4・6・8・14, 168-OO 5・7・9・10・13・15)

#### 166-OO

南北に長い楕円形土坑である。北側で165-OPと、西側で206-OPと近接し、176-OOの西辺を切っている。規模は長径1.3m、短径1.0mを測る。断面形はほぼ逆台形を呈し、深さは最大で18cmである。埋土は10Y R7/1灰色シルトで、先述の通り、土坑内に径12cm程までの礫の充填がみられる。出土遺物は土師器、瓦器、瓦質土器である。

#### 167-OO

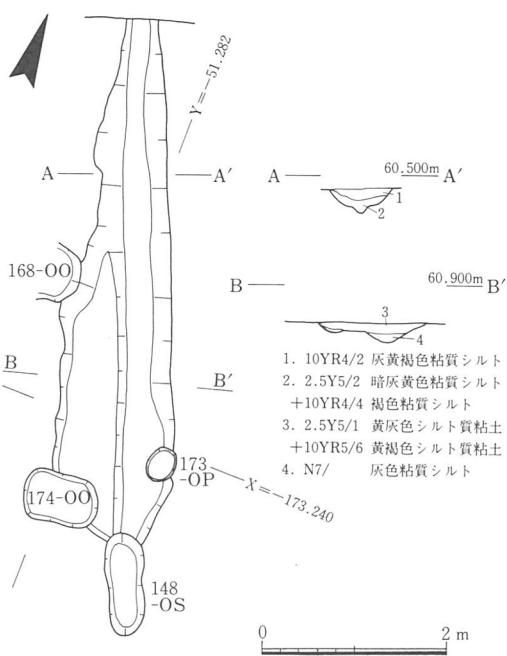
176-OOの北東隅を切って掘り込まれている北東-南西方向に長い隅丸方形の土坑である。長軸0.85m、短軸0.6m、深さ14cmを計る。埋土は10Y R5/1褐色細砂で、やはり多くの礫が含まれている。出土遺物は土師器、瓦器でそのうち瓦器碗（第25図2）は口径11.35cmで、内面にナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。土師皿（同4・6・8）は、いずれも口径7.5cm前後のものである。

插図 No. 図版	層位 地 区	器形 器種	法量 l h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外面) (断面)	残存 率	備 考
第25図 1	F 13 J C	瓦器 椀	口径 (14.0) 器高 (2.1) —	口縁部横ナデその他摩滅の為調整不明	0.5mm以下の砂粒を含む	不良	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 2.5Y8/4 (淡黄色)	5%	
第25図 2 図版23	F 13 J C	瓦器 椀	口径 (11.35) 器高 (3.15) —	口縁部横ナデ内面ナデ、外 面指オサエ	8.0mm以下の白・ 灰色を含む	良好	5 Y5/1 (灰色) 5 Y5/1 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	80%	
第25図 3	F 13 J D	瓦器 椀	器高 (1.0) 高台径 (3.0)	高台部、とりつけ、その他 摩滅の為調整不明	0.5mm以下の砂粒を含む	不良	10 Y R8/2 (灰白色) 10 Y R8/2 (灰白色) 10 Y R8/2 (灰白色)	10%	
第25図 4	F 13 J D	土師器 皿	口径 (7.4) 器高 0.8 —	口縁部内面横ナデ	0.5mm以下の砂粒を少し含む	良好	5 Y R6/6 (橙色) 5 Y R6/6 (橙色) 5 Y R6/6 (橙色)	10%	
第25図 5	F 13 J D	瓦器 椀	口径 (9.8) 器高 (2.3) —	口縁部ナデ、内面ナデ→ヘ ラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の砂粒を少し含む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰色)	20%	
第25図 6 図版23	F 13 J D	土師器 皿	口径 12.7 器高 1.3 —	全体に磨滅の為調整不明	0.5mm以下の砂粒を含む	不良	7.5Y R8/4 (浅黄橙色) 7.5Y R8/4 (浅黄橙色) 7.5Y R8/4 (浅黄橙色)	100%	%
第25図 7	F 13 J D	土師器 皿	口径 (7.0) 器高 (1.2) —	口縁部横ナデ内面ナデ外面 指オサエ	3.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好	10 Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R7/6 (橙色) 7.5Y R7/6 (橙色)	10%	
第25図 8 図版23	F 13 J D	土師器 皿	口径 (7.6) (1.4) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	2.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好	7.5Y R5/2 (灰褐色) 7.5Y R5/2 (灰褐色) 7.5Y R5/2 (灰褐色)	90%	
第25図 9	F 13 J D	土師器 皿	口径 (7.5) 器高 1.1 —	全体に磨滅の為調整不明	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	不良	2.5Y R7/6 (橙色) 2.5Y R7/6 (橙色) 2.5Y R7/6 (橙色)	70%	
第25図 10	F 13 J D	瓦器 椀	口径 (11.8) 器高 (2.3) —	全体に磨滅の為調整不明	0.5mm以下の砂 粒を含む	不良	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) 7.5Y8/2 (灰白色)	10%	
第25図 11 図版23	F 13 J C	土師器 羽釜	口径 (28.4) 器高 (8.0) つば径 (36.6)	つば部～口縁部横ナデ、内 面粗い横刷毛、外面粗いケ ズリ	1.0～3.0mmの礫 を多く含む	良好	10 Y R8/3 (浅黄橙色) 10 Y R8/3 (浅黄橙色) 10 Y R8/3 (浅黄橙色)	10%	
第25図 12 図版23	F 13 J C	土師器 羽釜	口径 (20.0) 器高 (8.0) つば径 (26.8)	つば部～口縁部横ナデ、内 面横刷毛、外面粗いケズリ	1.0mm以下の砂 粒を多く含む	良好	7.5Y R8/3 (浅黄橙色) 5 Y R8/3 (淡橙色) 10R6/6 (赤橙色)	10%	
第25図 13 図版	F 13 J D	土師器 甕	口径 (29.2) 器高 (8.25) —	全体に磨滅の為調整不明	20mm以下の白灰 褐色砂粒を多く含む	普通	7.5Y R8/1 (褐灰色) 7.5Y R8/1 (褐灰色) 7.5Y R8/1 (褐灰色)	5%	
第25図 15 図版23	F 13 J D	鉄器 鎌	渡り長 6.5 幅 1.0mm 爪残存長 1.2	幅1.0cm、厚さ3mmの鍔板 の先端を折り曲げる。	—	—	—	70%	16.28g

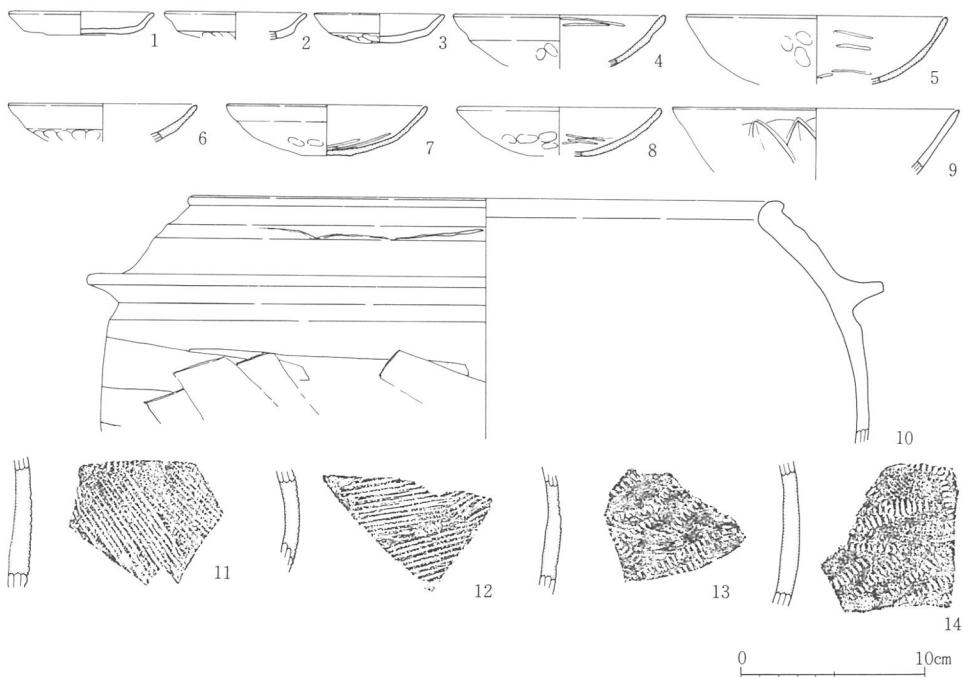
第6表 165-O P, 166～168-O O出土遺物観察表

## 168-O O

167-O Oの南側に近接する土坑で、176-O Oの東辺を切って掘り込まれている。東西に長い隅丸方形を呈し、東西1.1m、南北0.75mを計る。断面は皿状を呈し、深さは12cmである。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色細砂層であり、多くの礫が内包される。出土遺物は瓦器椀、土師皿、土師質甕、鉄鎌などである。



第26図 175-O S 平・断面図



第27図 175-O S 出土遺物実測図

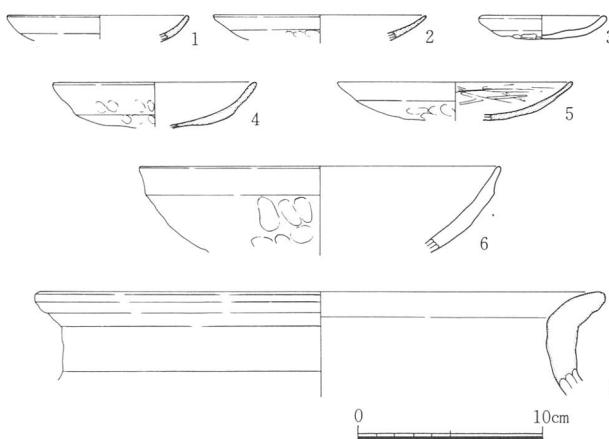
### 175-O S

III区のほぼ中央で、176-O Oの東側に位置している南北に延びる溝である。北端は、水田の段落ち部にかかり削平を受けており不明であるが、全長は5.6mを計る。幅は北半では40~70cm程をはかり、北端より2.5m付近からの南半では約1.3mである。溝の断面形は北半ではほぼ左右対称にゆるやかにくぼみ、さらに中央部はU字形に深くなっている。また南半では東寄りが深く、西半部で底部より10cmほど高い平坦部分をもつ。なお溝の深さは最大で26cmである。埋土はすべて上・下2層に堆積しており、とくに南半では、

掲図 No. 図版	層位 地 区	器 形 器 種	法 量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外 面) (断面)	残存 率	備 考
第27図 1	F 13 K D	土師器 皿	口径 (7.0) 器高 (1.5) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下砂 粒を多く含む	良好	5 YR7/6 (橙色) 5 YR7/6 (橙色) 5 YR7/6 (橙色)	20%	
第27図 2	F 13 K D	土師器 皿	口径 (7.8) 器高 (1.4) —	口縁部内面横ナデ、外面指 オサエ	0.5mm以下砂 粒を含む	良好	7.5 YR8/3 (浅黄橙色) 7.5 YR8/3 (浅黄橙色) 7.5 YR8/3 (浅黄橙色)	30%	
第27図 3	F 13 J D	土師器 皿	口径 7.6 器高 1.25 —	口縁部、内面ナデ、外面指 オサエ	3.0mm以下白、 灰、黒色砂礫、 砂粒を含む	良好	5 YR8/3 (淡橙色) 10 R6/6 (赤橙色) 10 R6/6 (赤橙色)	80%	
第27図 4	F 13 K D	瓦器 椀	口径 (11.4) 器高 (2.75) —	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ外面指オサエ	0.5mm以下白 色砂粒を少し含 む	良好	N6/0 (灰色) N6/0 (灰色) 10 Y2/1 (灰白色)	20%	
第27図 5	F 13 K D	瓦器 椀	口径 (14.0) 器高 (3.65) —	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	0.5mm以下白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N6/0 (灰色) 7.5 Y8/1 (灰色)	30%	
第27図 6	F 13 K D	瓦器 椀	口径 (10.2) 器高 (2.0) —	口縁部横ナデ、内面摩滅の 為調整不明、外面指オサエ	0.5mm以下砂 粒を含む	不良	10 Y2/1 (黑色) 10 Y2/1 (黑色) 5 Y8/2 (灰白色)	10%	
第27図 7	F 13 J D	瓦器 椀	口径 (10.9) 器高 2.75 高台径 2.5	口縁部横ナデ内面ナデ→ヘ ラミガキ、外面指オサエ	5.0mm以下灰、 褐色砂礫、砂粒 を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5 Y8/1 (灰白色)	60%	
第27図 8	F 13 J D	瓦器 椀	口径 (11.2) 器高 (2.65) —	口縁部ナデ内面ナデ→ヘラ ミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下白、 褐色砂粒を含む	良好	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) 10 YR (灰白色)	10%	
第27図 9	F 13 J D	青磁 碗	口径 (15.6) 器高 (3.5) —	外面は鎬蓮弁文を表現する	キメが細かく密 である。	良好	2.5 GY5/1 (オリーブ灰色) 2.5 GY5/1 (オリーブ灰色) N7/0 (灰白色)	5 %	
第27図 10 図版22	F 13 J D	土師器 羽釜	口径 (31.4) 器高 (13.1) つば径 (43.0)	口縁部横ナデ、内面摩滅の 為調整不明、外面、粗いケ ズリ	4.0mm以下白、 灰色砂礫、砂粒 を含む	良好	10 YR7/3 (にぶい黄橙色) 10 YR7/3 (にぶい黄橙色) 10 YR7/3 (にぶい黄橙色)	30%	
第27図 11	F 13 J D	瓦質 甕	— — —	内面、不定方向のハケ調整 外面、平行タタキ	0.5mm以下白 色砂粒を少し含 む	良好	N7/0 (灰白色) N3/0 (暗灰色) N8/0 (灰白色)	10% 未満	
第27図 12	F 13 J D	瓦質 甕	— — —	内面、不定方向のハケ→指 オサエ、外面平行タタキ	1.0mm以下白、 灰色砂粒を含む	良好	10 YR5/4 (にぶい黄橙色) N4/0 (灰色) 2.5 Y7/2 (灰黄色)	10% 未満	
第27図 13	F 13 J D	瓦質 甕	— — —	内面ナデ、外面列点状のタ タキ	2.0mm以下白、 灰色砂粒を含む	良好	7.5 Y6/1 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5 Y8/1 (灰白色)	10% 未満	
第27図 14	F 13 J D	瓦質 甕	— — —	内面、不定方向のハケナ デ、外面列点状のタタキ	0.5mm以下砂 粒を含む	良好	7.5 Y8/1 (灰白色) N4/0 (灰色) 7.5 Y8/1 (灰白色)	10% 未満	

第7表 175-O S出土遺物観察表

下層の灰白色シルト質粘土の底面に、灰色の細砂粒の薄い堆積がみられ、この溝が水路として機能していたことが窺える。一方、出土遺物は、土師器皿、瓦器椀、土師質羽釜、瓦質甕、青磁碗である。このうち青磁碗（第27図9）は、龍泉窯系のもので、外面に鎬連弁文を施している。羽釜（同10）は、外面口縁部に横ナデ、体部に粗いヘラケズリを施す。また瓦質甕（同11～14）の破片は、外面平行タタキのもの（11・12）と列点状のタタキを施したもの（13・14）がみられる。



第28図 176-OO出土遺物実測図

176-OO

III区のほぼ中央にある不整形な土坑である。東辺で167-OO・168-OOに、西辺で165-O P・166-OOに切られており、一方南辺では271-OOを切り込んでいる。南北4.5mをはかり、東西の長さは南端で0.7m、北端で2.5mである。断面形は逆台形を呈し、

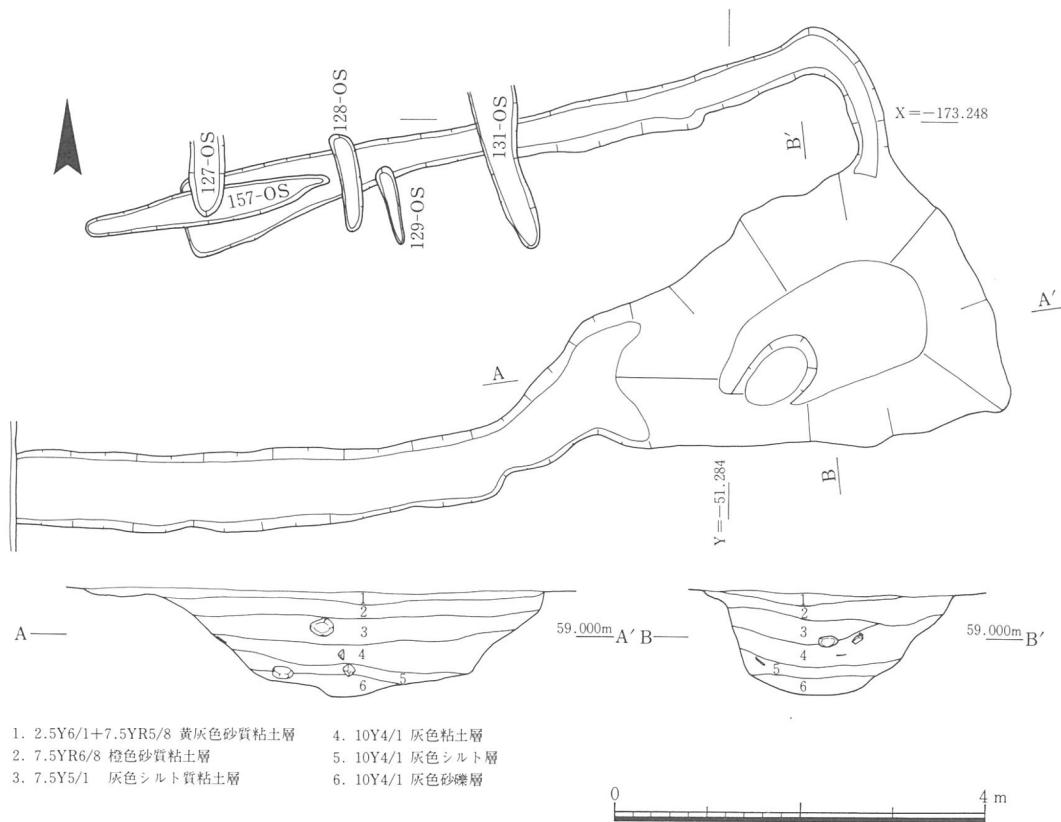
深さは10cmである。なお北端より1.5mほどはさらに7cm深くなっている。遺構面からの深さは17cmである。次に埋土の状況であるが、全面にわたり2.5Y6/1黄灰色+10YR5/8黄褐色シルト質粘土の堆積がみられる。なお北端の深く掘りこまれている部分では、この下にさらに2層の堆積がある。上から5Y5/1灰色粘土層、5Y5/1灰色+7.5YR5/8明褐色粘質土層である。出土遺物としては、土師器皿、鉢、瓦器皿、瓦質甕などである。

揮団 No. 図版	層位 地 区	器形 器種	法量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外 面) (断面)	残存 率	備 考
1	F13JD	瓦器 皿	口径 (9.8) 器高 (1.4) —	口縁部横ナデ	0.5mm以下白、 灰色砂粒を含む	不良	7.5Y7/1(灰白色) N6/0(灰色) 7.5Y7/1(灰白色)	5%	
2	F13JD	瓦器 皿	口径 (11.5) 器高 (1.3) —	口縁部横ナデ	0.5mm以下砂 粒を少し含む	良好	N6/0(灰色) 5Y8/1(灰白色) 5Y8/1(灰白色)	5%	
3	F13JC	土師器 皿	口径 6.9 器高 1.3 —	口縁部横ナデ内面ナデ外面 指オサエ	2.0mm以下白、 褐色砂粒を含む	良好	7.5YR7/4(にぶい橙色) 7.5YR7/4(にぶい橙色) 7.5YR7/4(にぶい橙色)	70%	
4	F13JC	瓦器 皿	口径 (10.8) 器高 (2.5) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下白 色砂粒を含む	良好	N8/0(灰白色) N8/0(灰白色) N8/0(灰白色)	25%	
5	F13JC	瓦器 皿	口径 (12.8) 器高 (2.05) —	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	0.5mm以下砂 粒を含む	良好	10Y8/1(灰白色) N2/0(黒色) 10Y8/1(灰白色)	10%	
6	F13JC	土師器 鉢	口径 (19.5) 器高 (4.6) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下砂 粒を多く含む	良好	10YR口縁部3/2(黒褐色) 2.5YR6/6(橙色) 5YR7/1(明褐色)	10%	
7	F13KD	瓦質 甕	口径 (30.0) 器高 (5.5) —	口縁部ナデ調整	6.0mm以下白、 灰色、礫、砂粒 を含む	良好	N6/0(灰色) N8/0(灰白色) N8/0(灰白色)	10%	

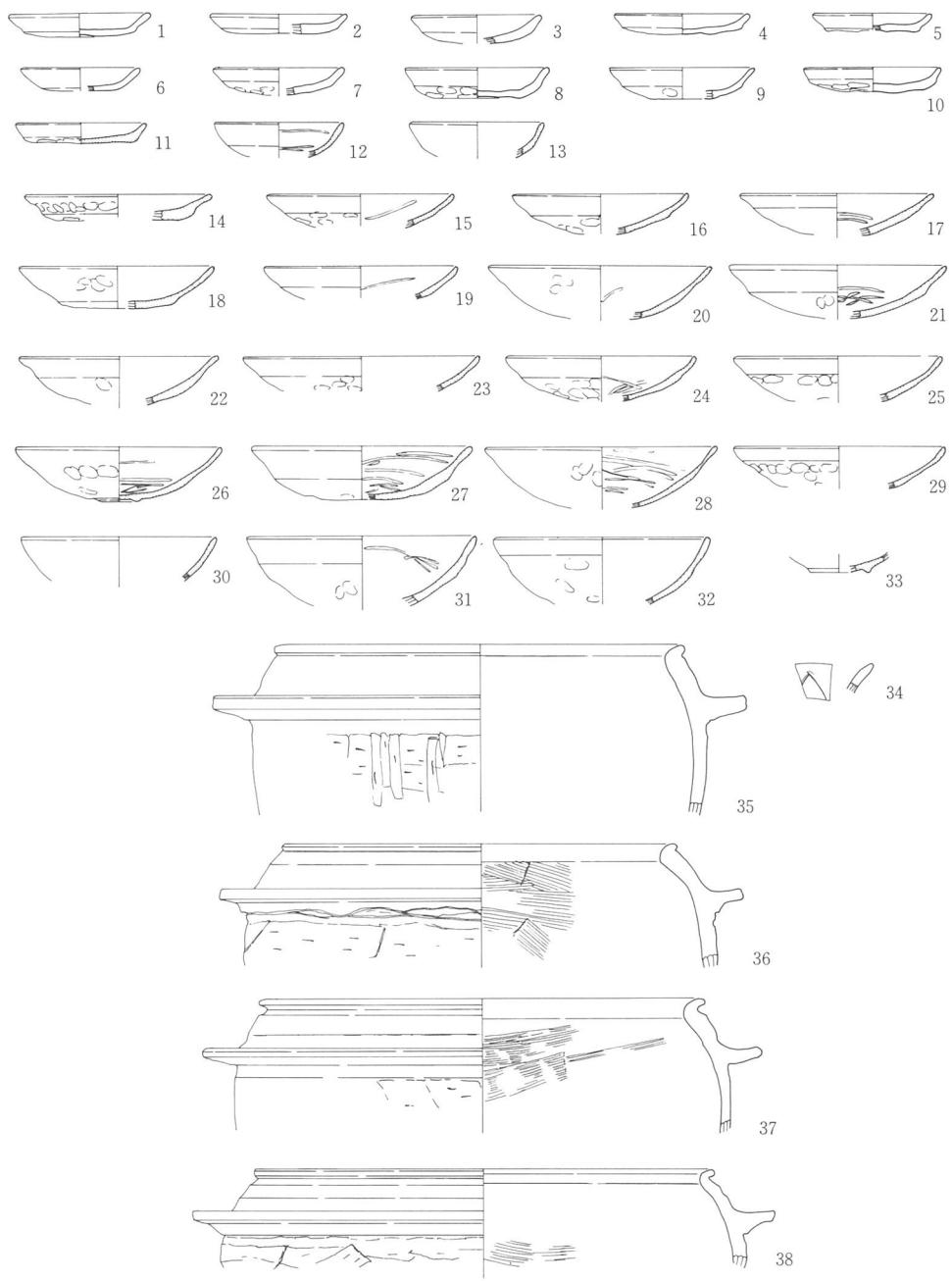
第8表 176-OO出土遺物観察表

184-O S

III区中央やや南寄りのF13L C・LD・MB・MC・MD・NB・NCにまたがって存在する溝である。平面形は西を上にしたU字形を呈しており、南側の屈曲部では深く掘り込まれた土坑となっている。溝は北側で屈曲部から先端までで長さ7mを計り、幅は平均して40cmほどである。一方、南側は溝の先端が調査区西壁にかかるため長さは不明であるが、検出できた範囲では、土坑部分も含めて約11mを計る。幅は北側より広く、約80cmである。なお、溝は北側先端部で127-O S、128-O S、129-O S、131-O S、157-O Sに切られている。ところで南側屈曲部の土坑部分についてみると、平面形は東西に長い不均整な橢円状を呈している。規模は長軸（東西）4.1m、短軸（南北）2.1m、深さ1.1mを計る。断面形は東西方向では逆台形を呈しており、南北方向ではおむねU字形を呈している。次に埋土についてみると、溝部分はすべて2.5Y6/1黄灰色+7.5YR5/8黄灰色砂質粘土層である。また土坑部分は6層に堆積している。上から順に説明すると、最上層である

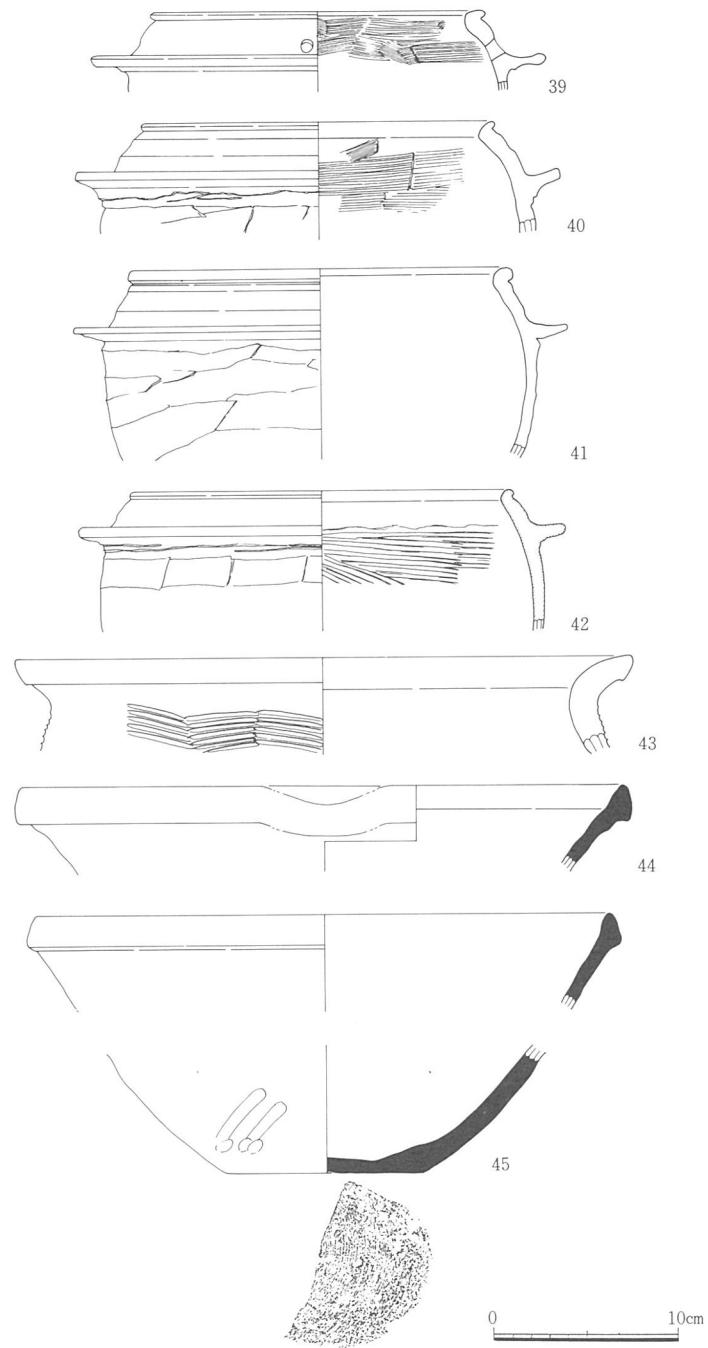


第29図 184-O S 平・断面図

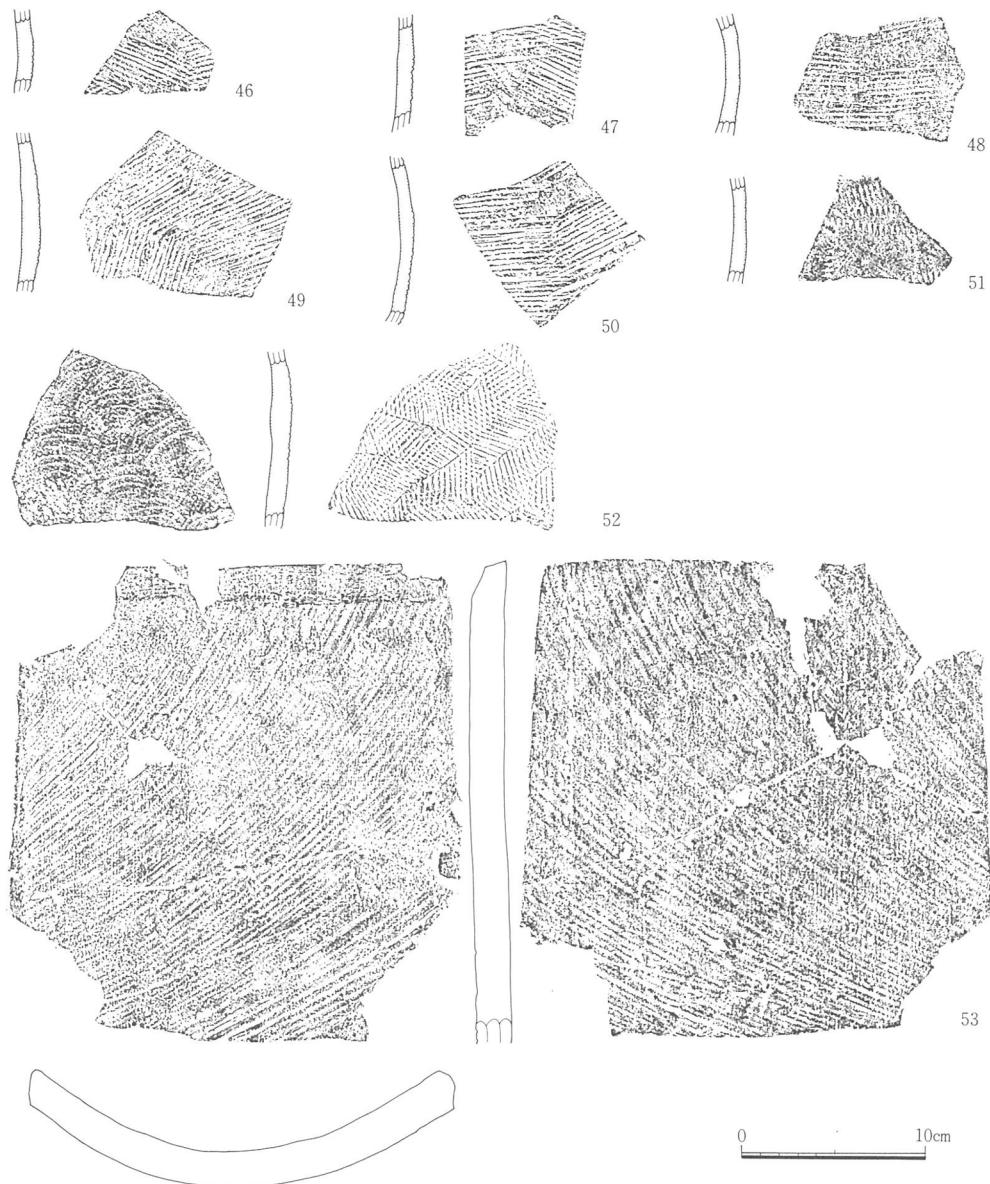


0 10cm

第30図 184-O S 出土遺物実測図(1)



第31図 184-O S 出土遺物実測図(2)



第32図 184-O S 出土遺物実測図(3)

第1層は溝部分と同様であり、以下（第2層）7.5Y R6/8橙色砂質粘土層、（第3層）7.5Y5/1灰色シルト質粘土層、（第4層）10Y4/1灰色粘土層、（第5層）10Y4/1灰色シルト層、（第6層）10Y4/1灰色砂礫層となっている。そして第3層が北側3分の1で途切れるほかは、およそ水平に堆積しており、各層の厚さは第1層が約10cm、第2層が約20cm、第3層が約30cm、第4層が約20cm、第5層が約10cm、第6層が約20cmとなっている。

出土遺物は、土師皿、瓦器皿、瓦器椀、青磁碗、土師質・瓦質羽釜、須恵器鉢、土師質・瓦質甕、瓦がみられた。

土師皿（第30図1～10）は、形態的に4つに分類できる。口径7.5cm程度で口縁部が外反し底部が平らなもの（1・2）、口縁部が外上方へたちあがり体部に緩やかな段をもち、底部は丸みをもつもの（3）、口縁部は外上方へたちあがり、平らな底部をもつもの（4～6・8）、口縁部外反し体部に段があり底部が丸いもの（7・9）である。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデを施し、多くは底部外面に指頭圧痕が残る。

瓦器皿（第30図11～19）は、形態により次のように分類できる。口縁部が内彎し底部が丸いもの（12・13）、口縁部が外上方にたちあがり底部が丸いもの（15・16・19）、口縁部が外上方にたちあがり底部はほぼ平坦なもの（11・18）、口縁部が外反し体部に段をもち底部は丸味をもつもの（17）、口縁部は外反し、体部に段をもち底部の平坦なもの（14）の5つである。調整は内面にナデ、口縁部にヨコナデを施し、外面に指頭圧痕を残す。また内面にヘラミガキのみられるものもある（12・15・17・19）。

瓦器椀（第30図20～33）は、すべて残存率30%までで、底部を欠損するものが大半である。比較的残りのよいものでみると、26・33は高台をもつが非常に退化したものである。一方、20・24・27・28などは高台をもたない。調整は、多くは内面にヘラミガキ及びナデを行い、外面には指頭圧痕を残している。

中国製青磁の破片が1点出土している（第30図34）。龍泉窯系の青磁碗で、体部外面に鎬蓮弁文を施す。釉色は10Y6/2オリーブ灰色を呈する。

羽釜は8点出土しており、うち7点が土師質（第30図35～38、第31図39～41）で、1点が瓦質（第31図42）である。土師質のものは、形態的にいずれも同様で、口縁が内傾してのび、口縁端部はごく短く外反する。また瓦質のものも基本的に土師質と同様の形態を呈しているが、口縁端部は外方に丸く肥厚するだけである。

鉢はすべて須恵器である（第31図44・45）。44は口縁部破片で片口部分が含まれる。45は口縁部破片と杯部下半・底部の破片である。復元口径は両者とも33cm前後である。形態は、体部が直線的に伸び、口縁端部が外下方へ肥厚し、断面三角形をなす。調整技法については、2点とも口縁部・体部外面にヨコナデ、体部内面にナデを施す。さらに45では体部外面下部に指頭圧痕が残り、底部外面には明瞭な回転糸切り痕が残っている。

土師質甕（第31図43）は、口縁部が外反し、口縁端部は下外方へ肥厚する。体部外面にタタキ、内面にナデを施している。

挿図 No. 図版	層位 地区	器形 器種	法量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外)面 (断)面	残存 率	備 考
第30図 1	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	(7.6) 1.29	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面ナデ、指オサエ	1.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好 2.5YR7/3 (にぶい橙色) 5YR6/4 (にぶい橙色)	30%	
第30図 2	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	(7.4) 1.1	口縁部ヨコナデ、内面、外 面ナデ	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色)	30%	
第30図 3	F13MD	土師器 皿	口径 器高 —	(7.2) 1.6	口縁部ヨコナデ、内面、外 面ナデ	0.5mm以下の白 色砂粒を含む	良好 10YR7/3 (にぶい黄橙色) 10YR7/3 (にぶい黄橙色) 10YR7/3 (にぶい黄橙色)	20%	
第30図 4	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	(7.4) 1.1	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を含む	良好 10YR8/2 (灰白色) 10YR8/2 (灰白色) 10YR8/2 (灰白色)	40%	
第30図 5	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	(6.6) 1.0	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の白、 褐色砂粒を多く 含む	良好 2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色)	20%	
第30図 6	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	(6.6) 1.3	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好 10YR7/2 (にぶい黄橙色) 10YR7/2 (にぶい黄橙色) 5YR7/6 (橙色)	25%	
第30図 7	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	(7.4) 1.55	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	5.0mm以下の白、 灰色砂礫、砂粒 を含む	良好 7.5YR7/3 (にぶい橙色) 7.5YR7/3 (にぶい橙色) 7.5YR7/3 (にぶい橙色)	20%	
第30図 8 図版24	F13MD	土師器 皿	口径 器高 —	(8.0) 1.7	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面ナデ、指オサエ	1.0mm以下の白、 灰色砂粒を含む	良好 5YR7/4 (にぶい橙色) 5YR7/4 (にぶい橙色) 5YR7/4 (にぶい橙色)	40%	
第30図 9	F13MD	土師器 皿	口径 器高 —	(8.0) 1.7	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色)	40%	
第30図 10 図版24	F13MC	土師器 皿	口径 器高 —	7.6 1.4	口縁部ヨコナデ内面ナデ、 外面指オサエ	5.0mm以下の白 色砂礫、砂粒を 多く含む	良好 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色)	98%	
第30図 11 図版24	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(7.2) 1.15	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	不良 7.5YR5/1 (褐灰色) 7.5YR5/1 (褐灰色) 7.5YR5/1 (褐灰色)	50%	
第30図 12	F13MD	瓦器 皿	口径 器高 —	(7.2) (1.9)	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 ヘラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の灰 色砂粒を含む	良好 N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	15%	
第30図 13	F13MD	瓦器 皿	口径 器高 —	(7.4) (1.95)	内面、外面ナデ	0.5mm以下の白、 灰色砂粒を少し 含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	
第30図 14	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(10.4) 1.45	口縁部ヨコナデ内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好 N3/0 (暗灰色) N4/0 (灰色) 2.5Y6/4 (にぶい橙色)	15%	
第30図 15	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(10.4) 1.45	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 ヘラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	10%	
第30図 16	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(9.8) (2.2)	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の白、 灰色砂粒を含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	20%	
第30図 17	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(10.6) (2.25)	口縁部ヨコナデ、内面ヨコ ナデ、ヘラミガキ、外面ナ デ	1mm以下の白、 灰色砂粒を含む	良好 N7/0 (灰色) 7.5Y6/1 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	30%	
第30図 18 図版24	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(10.6) 2.3	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の灰 色砂粒を含む	良好 N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	40%	
第30図 19	F13MC	瓦器 皿	口径 器高 —	(10.8) (1.8)	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 ヘラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の灰 色砂粒を少し含 む	良好 N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	5%	

第9表 184-O S出土遺物観察表(1)

攝図 No. 図版	層位 地区	器形 器種	法量 l h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外面) (断面)	残存 率	備 考
第30図 20	F 13MD	瓦器 椀	口径 (12.2) 器高 (2.9) —	口縁部ヨコナデ、内面ヘラ ミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白、 灰色砂粒を含む	良好	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) N8/0 (灰白色)	30%	
第30図 21	F 13MC	瓦器 椀	口径 (12.0) 器高 (2.9) —	口縁部ヨコナデ、内面ヘラ ミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白、 灰色砂粒を含む	良好	10Y2/1 (黒) 10Y2/1 (黒) 10Y8/1 (灰白色)	30%	
第30図 22	F 13MD	瓦器 椀	口径 (10.8) 器高 (2.6) —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の中 白色砂粒を含む	良好	2.5Y4/1 (黄灰色) 2.5Y2/1 (黒褐色) 10Y6/3 (にぶい黄橙色)	20%	
第30図 23	F 13MD	瓦器 椀	口径 (13.2) 器高 (1.45) —	口縁部、内面ヨコナデ、外 面指オサエ	0.5mm以下の中 灰色砂粒を含む	不良	2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色)	5%	
第30図 24	F 13MC	瓦器 椀	口径 (10.6) 器高 (2.45) —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 ヘラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の中 白色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	25%	
第30図 25	F 13MC	瓦器 椀	口径 (11.6) 器高 (2.5) —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	3.0mm以下の中 白色砂礫、砂粒 を含む	良好	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	
第30図 26	F 13MC	瓦器 椀	口径 (11.4) 器高 3.0 高台径 (2.3)	口縁部ナデ、内面ナデ、ヘ ラミガキ、外面指オサエ	2.0mm以下の中 白色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	20%	
第30図 27	F 13MC	瓦器 椀	口径 (12.0) 器高 (2.9) —	口縁部ヨコナデ、内面ヘラ ミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の中 灰色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	30%	
第30図 28 図版24	F 13MC	瓦器 椀	口径 (12.8) 器高 (3.3) —	口縁部ヨコナデ、内面ヘラ ミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の中 灰色砂粒を少し 含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	30%	
第30図 29	F 13MC	瓦器 椀	口径 (11.8) 器高 (2.3) —	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の中 灰色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	
第30図 30	F 13MC	瓦器 椀	口径 (10.6) 器高 (2.4) —	口縁部、内面、外面、ナデ	0.5mm以下の中 白色砂粒を含む	普通	2.5Y3/1 (黒褐色) 2.5Y3/1 (黒褐色) 10Y7/1 (灰白色)	30%	
第30図 31	F 13MD	瓦器 椀	口径 (12.6) 器高 (3.75) —	口縁部ヨコナデ、内面ミガ キ、外面指オサエ	1.0mm以下の中 白色砂粒を含む	良好	7.5Y6/1 (灰色) 7.5Y6/1 (灰色) 7.5Y6/1 (灰色)	30%	
第30図 32	F 13MD	瓦器 椀	口径 (12.0) 器高 (3.7) —	口縁部、内面ナデ、外面指 オサエ	3.0mm以下の中 白色砂礫、砂粒 を含む	不良	N3/0 (暗灰色) N4/0 (灰色) 10Y (灰白色)	10%	
第30図 33	F 13MD	瓦器 椀	器高 (1.1) 高台径 (3.3)	内面、外面ナデ	0.5mm以下の中 白色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	5%	
第30図 34	F 13MC	青磁 碗	— — —	外面は鏽薙文を表現する。 内面は横ナデ	キメが細かく密 である	良好	10Y6/2 (オリーブ灰色) 10Y6/2 (オリーブ灰色) 5 Y8/1 (灰白色)	2%	
第30図 35	F 13MC	土師器 羽釜	口径 (22.8) 器高 (9.3) つば径 (29.6)	内面ナデ、外面ケズリ	2.0mm以下の中 白色砂粒を含む	良好	7.5Y R6/3 (にぶい褐色) 5 Y R4/1 (褐灰色) 7.5Y R7/3 (にぶい橙色)	5%	
第30図 36	F 13MD	土師器 羽釜	口径 (21.6) 器高 (6.8) つば径 (29.0)	口縁部～つば横ナデ、つば 以下粗いケズリ、すす付着、 内面横刷毛	1.0mm以下の中 白色砂粒を多く含 む	良好	7.5Y R8/4 (淡黄橙色) 5 Y R7/8 (橙色) 5 Y R7/4 (にぶい橙色)	10%	
第30図 37	F 13MC	土師器 羽釜	口径 (24.6) 器高 (7.4) つば径 (31.0)	口縁部～つば、ナデ、内面 ナデ、刷毛、外面ケズリ	3.0mm以下の中 黒、砂粒を含む	良好	5 Y R7/4 (にぶい橙色) 5 Y R6/4 (にぶい橙色) 5 Y R6/4 (にぶい橙色)	10%	
第30図 38	F 13MD	土師器 羽釜	口径 (25.2) 器高 (5.4) つば径 (32.0)	口縁部～つばヨコナデ、外 面ケズリ、スス付着、内面 刷毛、摩滅激しく調整不明	1.0mm～2.0mm大 の砂礫含む	良好	7.5Y R7/2 (明褐灰色) 7.5Y R3/2 (黒褐色) 7.5Y R7/2 (明褐灰色)	10%	

第10表 184-O S 出土遺物観察表(2)

挿図 No. 図版	層位 地 区	器 形 器種	1 法 量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外面) (断面)	残存 率	備 考
第31図 39	F 13MC	土師器 羽釜	口径 (17.8) 器高 (4.3) つば径 (24.6)	口縁部～つばナデ、内面刷毛、外面ケズリ	2.0mm以下の白、褐色砂粒を含む	良好	10Y R8/3 (浅黄橙色) 10Y R3/2 (黒褐色) 10Y R8/3 (浅黄橙色)	30%	
第31図 40	F 13MD	土師器 羽釜	口径 (19.0) 器高 (6.0) つば径 (26.4)	口縁部～つばヨコナデ、内面刷毛、外面ケズリ	1.0mm程度の白色砂粒を多く含む	良好	10Y R7/2 (にぶい黄橙色) 10Y R8/2 (灰白色) 10Y R8/2 (灰白色)	5%	
第31図 41 図版24	F 13MD	土師器 羽釜	口径 (20.3) 器高 (10.2) つば径 (26.8)	口縁部～つばヨコナデ、内面不定ナデ(多くは横方向)外面ケズリ、スス付着	精良であるが、若干の砂礫含む	良好	10Y R7/1 (灰白色) 10Y R7/1 (灰白色) 10Y R7/1 (灰白色)	30%	
第31図 42 図版24	F 13MD	瓦質 羽釜	口径 (20.8) 器高 (7.5) つば径 (26.4)	口縁部～つばヨコナデ、内面ナデ、刷毛、外面ナデ、ケズリ	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	10Y 5/1 (灰色) 10Y 5/1 (灰色) 10Y 8/1 (灰白色)	20%	
第31図 43 図版	F 13MC	土師器 甕	口径 (33.4) 器高 (5.25) —	口縁部、内面ナデ、外側タタキ	4.0mm以下白色砂礫及び砂粒含む	良好	10Y R7/4 (にぶい黄橙色) 2.5Y 6/4 (にぶい橙色) 2.5Y 7/1 (灰白色)	20%	
第31図 44	F 13MD	須恵質 鉢	口径 (33.5) 器高 (4.65) —	口縁部、外面ヨコナデ、内面ナデ	4.0mm以下灰色砂礫及び砂粒含む	良好	N7/0 (灰白色) 7.5Y 6/1 (灰色) N7/0 (灰白色)	5%	
第31図 45	F 13MC	須恵質 鉢	口径 (32.3) 器高 (12.0) 底径 (10.0)	口縁、内面ナデ、外面ナデ、指オサエ、底部回転系切未調整	2.0mm以下白色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) N5/0 (灰色)	45%	
第32図 46	F 13MC	瓦質 甕	— — —	内面不定方向のハケ調整、外面平行タタキ	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	N2/0 (黒色) N3/0 (暗灰色) N8/0 (灰白色)	10% 未満	
第32図 47	F 13MD	瓦質 甕	— — —	内面不定方向のハケ調整、外面平行タタキ	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) 10Y 5/1 (灰色) 2.5Y 8/1 (灰白色)	10% 未満	
第32図 48	F 13MD	瓦質 甕	— — —	内面不定方向のハケ調整、外面平行タタキ	微砂を含むが精選されており細かい	良好	5Y 5/1 (灰色) 10Y 4/1 (灰色) 5Y 8/2 (灰白色)	10% 未満	
第32図 49	F 13MC	瓦質 甕	— — —	内面 細かいハケ調整、ナデ、外面平行タタキ	微砂を含むが精選されている。	良好	5B 3/1 (暗青灰色) N4/0 (灰色) 5Y 8/1 (灰白色)	10% 未満	
第32図 50	F 13MC	瓦質 甕	— — —	内面ハケ→指オサエ、外面平行タタキ	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) 7.5Y 8/1 (灰白色)	10% 未満	
第32図 51	F 13MB	瓦質 甕	— — —	内面ハケ→ナデ調整、外面列点状のタタキ	微砂を含むが精選されている	良好	10Y 7/1 (灰白色) N3/0 (暗灰色) 7.5Y 8/1 (灰白色)	10% 未満	
第32図 52	F 13MC	瓦質 甕	— — —	内面 青海波のあて具痕、外面 繊杉状のタタキ	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	10Y 4/1 (灰色) 10Y 5/1 (灰色) 10Y 7/1 (灰白色)	10% 未満	
第32図 53 図版	F 13MD	瓦 平瓦	長さ (26.1) 幅 23.9 厚み 2.0	凸面離れ砂粒付着、繩叩きの跡あり、凹面 布目、離れ砂の跡 狹端面及び両側縁に面取り	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) 7.5Y 8/1 (灰白色)	90%	

第11表 184-O S 出土遺物観察表(3)

第32図46～52は瓦質甕の破片である。46～50は外面に平行タタキ、内面にハケ調整がみられる。51は外面に列点状のタタキが施され、内面はハケののちナデ調整が施される。そして52は外面に菱形状タタキ、内面に同心円文のあて具痕跡が認められる。

平瓦(第32図53)が1点出土している。残存長26.1cm、幅23.9cm、厚さ2.0cmを計る。

凸面には全体に繩叩きの痕跡が残っており、凹面には布目圧痕が全面に認められる。また

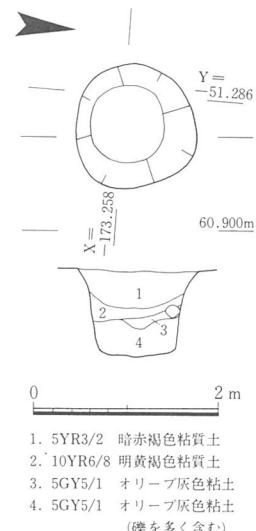
凹・凸面ともに離れ砂の使用が認められる。

### 199-O O

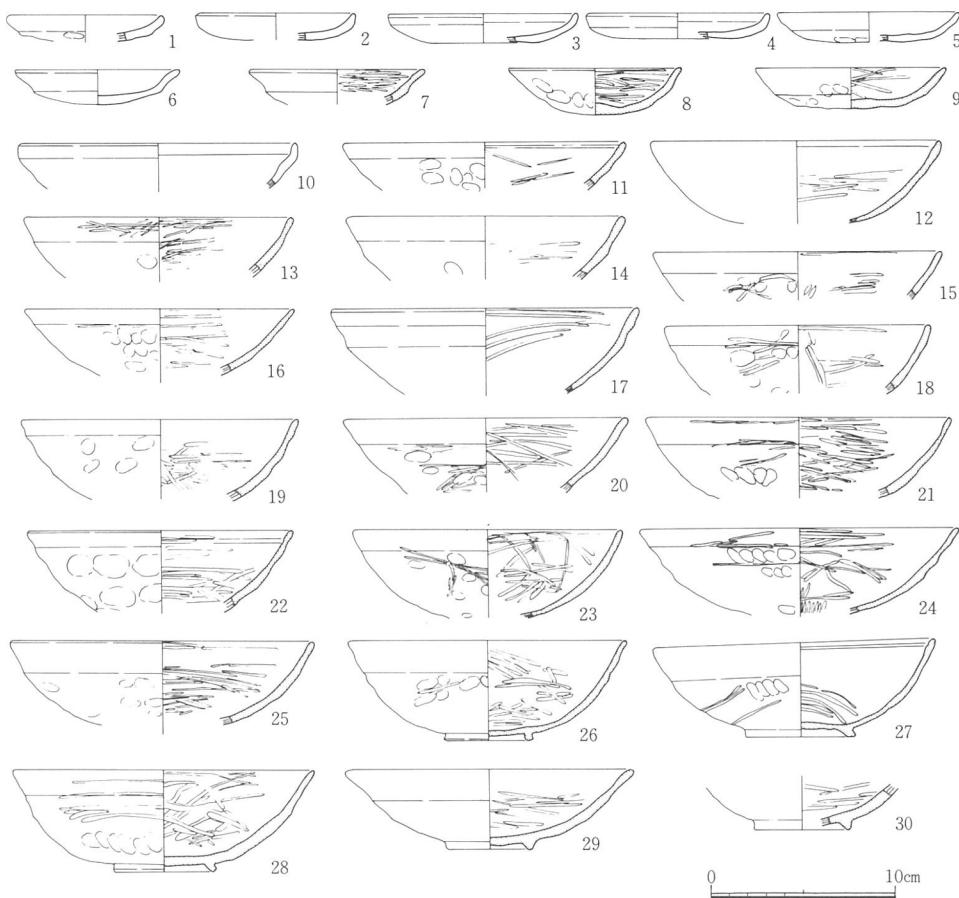
III区南半部西寄りのF13O Cに位置する土坑で、井戸である可能性が高い。平面形はやや不整形な円形を呈し、直径は1.3mを計る。断面形は逆台形を呈し、深さは0.96mである。また底部の直径は0.8mを計る。埋土は4層の堆積がみられる。上から、（第1層）砂礫とマンガン斑を多く含む5YR3/2暗赤褐色粘質土、（第2層）砂礫を多く含む10YR6/8明黄褐色粘質土、（第3層）5GY5/1オリーブ灰色粘土、（第4層）5cm大までの礫を多く含む5GY5/1オリーブ灰色粘土となっている。第1層は上から40cmほど堆積しており、その下約10cmが第2層、そしてその下約10cmが第3層となっており、最後に第4層が約30cm堆積している。なお第3層は南3分の1で途切れており、この部分では第2層の下はすぐに第4層となっている。

出土した遺物には、土師皿、瓦器小皿、瓦器碗がある。土師皿（第34図1～6・10）には、口径8.0cm前後、器高1.5cm程度で、ほぼ平らな底部にゆるやかに内彎する体部と、屈曲し直立する口縁部を有するもの（1・2）、口径10.0cm程度、器高1.5cm程度で、形態的には前者と同様であるが口径の大きいもの（3～5）、また口径8.8cm、器高1.9cmとやや深手の皿で、比較的丸みを帯びた底部を有し、口縁部は強くヨコナデを施すために屈曲し外反するもの（6）などがある。またそれらの他に口径14.6cmを計る大振りの皿（10）もある。この皿は口縁部のみの破片であるため、全体の形態は不明であるが、平らで広い底部とやや外反する体部に屈曲し直立する口縁部を有するものと思われる。

瓦器小皿は、いずれも口縁部外面にヨコナデ、内面にヘラミガキをおこなう。なかには形態的に異なったもののが存在する。1つは口径9.4cmで形態が土師皿（6）と同様のもの（7）で、もう一つ（8）は、口径9.4cm、器高1.9cmで全体的にやや丸みを帯びるもので、口縁部は外反し、底部は内側に肥厚する。この土器については、時期的に他の土器よりも新しいものと思われる。さらに、瓦器小皿は、口径10.2cm、器高2.2cmを計り、底部はほぼ平らで、ゆるやかに内彎する体部と外反する口縁部を有するものがある。この形態のものは、この時期ではもっと



第33図 199-O O  
平・断面図



第34図 199-〇〇出土遺物実測図

も一般的なものである。

瓦器椀は、ほとんどが残存率10%以下の破片であるため、全体の形態を復元することは難しいが、口径15.0cm前後、器高5.5cm前後で、やや丸みを帯びた体部に内彎するかもしくは若干外反する口縁部を有するものが多い。またほとんどが器面の磨耗が著しく、調整の不明なものが多いうものの、体部内・外面ともにやや太めのヘラミガキを施すものと思われる。また底部外面には、指頭圧痕が口縁部に平行して連続的に認められる。これらの瓦器椀の時期は、体部の形態そして調整より、12世紀中頃から後半の間で捉えられるものである。また、199-〇〇出土瓦器椀には、このタイプの他に時期的にやや新しいと考えられるもの（29）も存在する。これは、口径14.8cm、器高4.3cmと口径に比べて器高が浅いもので、体部は若干丸みを帯びるものの、口縁部は大きく外反している。時期は13世紀前半

插図 No. 図版	層位 地 区	器形 器種	法量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外面) (断面)	残存 率	備 考
第34図 1	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (8.4) (1.4)	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	2.0mm以下の白 色砂粒を含む	普通	7.5Y7/1 (明褐色) 7.5Y7/1 (明褐色) 10YR8/2 (灰白色)	20%	
第34図 2	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (8.2) 1.4	口縁部、内面、外面ナデ調 整	2.0mm以下の灰、 褐色砂粒を含む	良好	10YR8/3 (浅黄橙色) 10YR8/3 (浅黄橙色) 10YR8/3 (浅黄橙色)	30%	
第34図 3	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (10.0) 1.6	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面ナデ、底部指オサエ	1.0mm以下の灰、 黒色砂粒を含む	良好	2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色)	40%	
第34図 4	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (9.6) 1.35	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面ナデ、底部指オサエ	1.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好	2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色) 2.5Y8/2 (灰白色)	30%	
第34図 5	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (9.8) 1.6	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	1.0mm以下の白、 灰色砂粒を多く 含む	良好	7.5YR7/4 (にぶい橙色) 7.5YR7/4 (にぶい橙色) 7.5YR7/4 (にぶい橙色)	40%	
第34図 6	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (8.8) 1.9	口縁部、内面、外面ナデ調 整	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	40%	
第34図 7	F 130 C	瓦器 皿	口径 器高 — (9.4) 1.9	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	普通	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	15%	
第34図 8 図版22	F 130 C	瓦器 皿	口径 器高 — (9.4) (2.5)	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を含む	良好	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N2/0 (黒色)	95%	
第34図 9 図版	F 130 C	瓦器 皿	口径 器高 — 10.2 2.2	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	普通	N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10Y8/0 (灰白色)	95%	
第34図 10	F 130 C	土師器 皿	口径 器高 — (14.6) (2.4)	口縁部内面、外面ナデ調整	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好	7.5YR7/3 (にぶい橙色) 7.5YR7/4 (にぶい橙色) 7.5YR7/4 (にぶい橙色)	20%	
第34図 11	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (13.2) (2.6)	口縁部横ナデ、内面ヘラミ ガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の灰 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	10%	
第34図 12	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (15.6) (5.5)	磨減が激しく調整不明	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	30%	
第34図 13	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (14.4) (3.3)	口縁部、内面、ナデ→ヘラ ミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	
第34図 14	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (15.0) (3.5)	口縁部内面ナデ、外面指オ サエ	0.5mm以下の白 色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	20%	
第34図 15	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (15.6) (2.65)	口縁部ナデ、内面ヘラミガ キ、外面指オサエ→ヘラミ ガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	15%	
第34図 16	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (14.4) (3.6)	口縁部、内面ナデ→ヘラミ ガキ、外面指オサエ→ヘラ ミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	10%	
第34図 17	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (16.2) (4.6)	口縁部外面ナデ、内面ヘラ ミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	10%	
第34図 18	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (14.4) (3.8)	口縁部、内面ナデ→ヘラミ ガキ、外面指オサエ→ヘラ ミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	
第34図 19	F 130 C	瓦器 椀	口径 器高 — (14.6) (4.4)	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N5/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	30%	

第12表 199-O O出土遺物観察表(1)

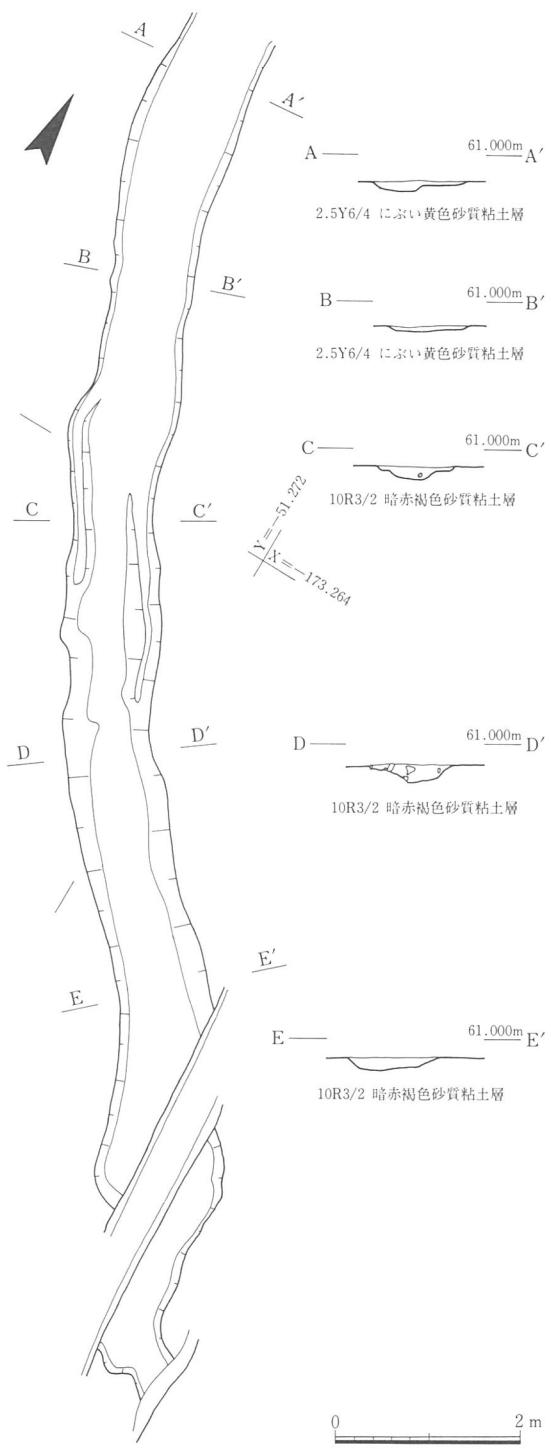
挿図 No. 図版	層位 地区	器形 器種	法量 h b	調 整	胎 土	焼成	(内面) 色調 (外面) (断面)	残存 率	備 考
第34図 20	F130C	瓦器 椀	口径 器高 —	（15.2） (4.1)	口縁部ナデ、内面へラミガ キ、外面指オサエ→へラミ ガキ	3.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	20%	
第34図 21	F130C	瓦器 椀	口径 器高 —	（16.4） (4.4)	口縁部、内面ナデ→へラミ ガキ、外面指オサエ→へラ ミガキ	0.5mm以下の中 色砂粒を少し含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	20%	
第34図 22	F130C	瓦器 椀	口径 器高 —	（14.2） (4.4)	口縁部横ナデ、内面へラミ ガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の中 色砂粒を少し含む	普通 N3/0 (灰色) N3/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	10%	
第34図 23	F130C	瓦器 椀	口径 器高 —	（14.4） (4.85)	口縁部、内面ナデ→へラミ ガキ、外面指オサエ→へラ ミガキ	0.5mm以下の白、 灰色砂粒を少し含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	30%	
第34図 24	F130C	瓦器 椀	口径 器高 —	（17.2） (4.65)	口縁部横ナデ、内面ナデ→ へラミガキ、外面指オサエ →へラミガキ	2.0mm以下の白 色砂礫、砂粒を含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	20%	
第34図 25	F130C	瓦器 椀	口径 器高 —	（16.2） (4.55)	口縁部横ナデ、内面ナデ→ へラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含む	良好 N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	25%	
第34図 26	F130C	瓦器 椀	口径 器高 高台径 —	（14.6） 5.4 (4.7)	口縁部、内面ナデ→へラミ ガキ、外面指オサエ→へラ ミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含む	良好 N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	40%	
第34図 27 図版22	F130C	瓦器 椀	口径 器高 高台径 —	（14.9） 5.4 (6.0)	口縁部横ナデ、内面へラミ ガキ、外面指オサエ→へラ ミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含む	良好 N8/0 (灰白色) N4/0 (灰色) N7/0 (灰白色)	50%	
第34図 28 図版22	F130C	瓦器 椀	口径 器高 高台径 —	16.0 5.5 5.5	口縁部、内面ナデ→へラミ ガキ、外面指オサエ→へラ ミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含む	良好 N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	80%	
第34図 29 図版22	F130C	瓦器 椀	口径 器高 高台径 —	（14.8） 4.3 (4.4)	内面へラミガキ、外面磨滅 の為調整不明	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含む	普通 N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	40%	
第34図 30	F130C	瓦器 椀	器高 — 高台径 —	— (2.3) (5.0)	内面へラミガキ、外面磨滅 の為調整不明	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含む	普通 N3/0 (暗灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	15%	

第13表 199-OO出土遺物観察表(2)

に比定できよう。なお上記の出土遺物は、ごく少数が第1層内から出土した他は、すべて第3・4層中から出土している。挿図に掲載したものでは、第34図2・12が第1層から出土したものである他は、すべて第3、4層中からの出土遺物である。

先述のように、出土遺物はその大半が12世紀中葉～後半に属するものであり、13世紀前半のものまで含まれていた。このことより、これら遺物の示す時期が、この井戸の機能していた時期であると考えられる。ところで、199-OOの東側には、同じ方位を示し、並列している掘立柱建物228-O Bと250-O Bがある。別項で詳述するが、この2つの建物の時期はおよそ12世紀中葉～後半であり、199-OOとは同時期に存在している。そのうえ、228-O B・250-O Bと199-OOの位置関係を考慮すれば、両者は強い関連性をもつ遺構であると考えてよいものと思う。

(吉村)



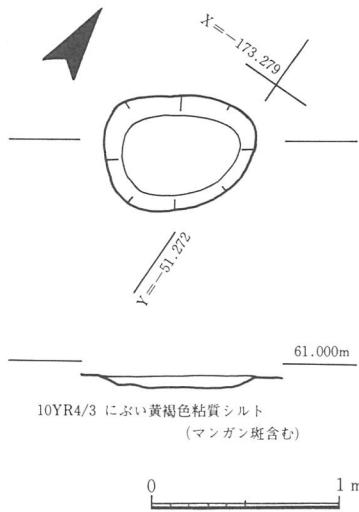
第35図 201-O S 平・断面図

201-O S

III区中央部をほぼ南北に走る溝で、長さ約14mにわたって検出した。北端については、既に削平を受けており遺存していない。しかし南側については、調査区外にまでのびることが確認できた。溝幅は部分により多少の差はあるが、およそ1.0m～1.2mの範囲である。深さは15cm～20cmほどで、その断面形は逆台形ないしは、U字形を呈している。又、段掘り状に掘削されている部分も存在する。

埋土は、暗赤褐色の砂質粘土を主体とし、にぶい黄色の砂質粘土を含んでいる。又、地山に含まれる円礫が多く認められる。埋土内には遺物の包含は極めて少なく、極僅かに須恵器片を検出したにすぎない。しかしながらこの須恵器も細片のため、器種、時期等を特定できない。

この溝は、250-O Bを横断して掘削されている。埋土の特徴は、何れも近似しており、その前後を決定する事はできなかつた。



第36図 204-O O平・断面図

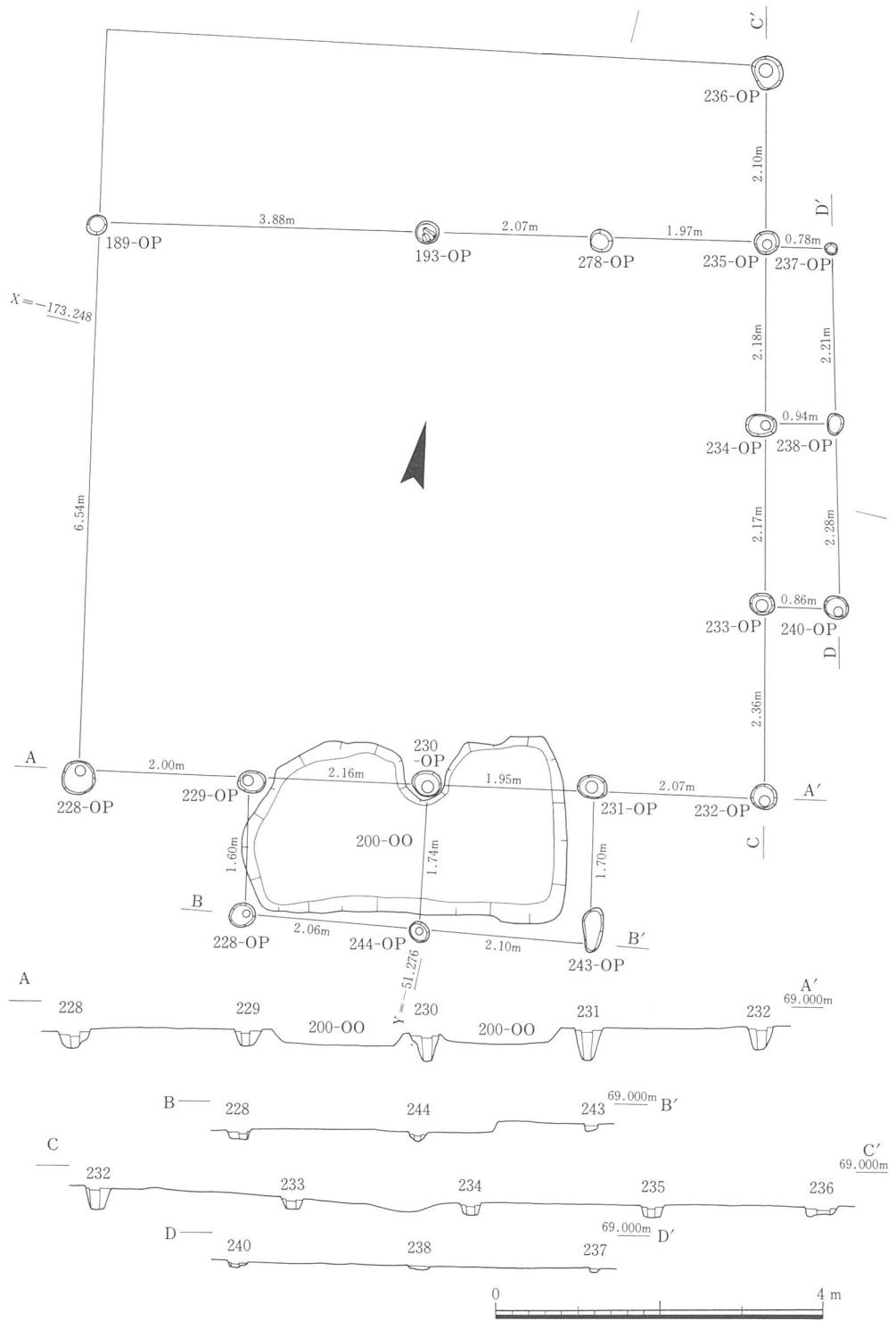
### 204-O O

III区南端で検出された不整円形を呈する土坑である。長軸0.8m、短軸0.6mをそれぞれ計測する。深さは上部が削平を受けているため、僅か6cmほどしか残存していなかった。

埋土には、にぶい黄褐色を呈する粘質シルトが堆積していた。又、埋土内には全く遺物は含まれていなかった。埋土の色調からみて、後述の建物群とほぼ同時期の可能性が高い。

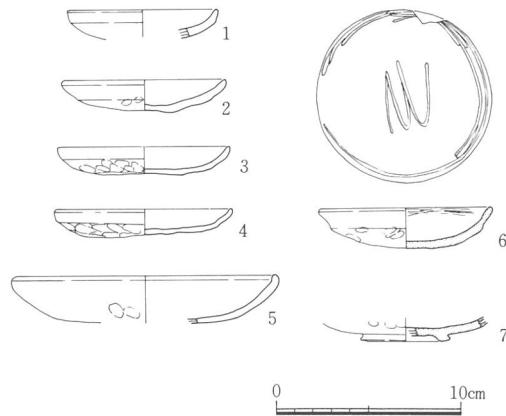
### 228-O B

III区中央部で検出された掘立柱建物である。梁行・桁行共に4間の規模を有している。南北方向8.81m、東西方向8.18mを計測し、南北方向が約60cmほど長い。長軸を桁行、短軸を梁行とすれば、桁行東側に庇、梁行南側に張りだし部を有する建物となる。この建物は、本来北東方向へ緩傾斜する斜面地に立地していたものと考えられるが、後世の耕地造成に伴い削平を受け、柱穴の2/3が既に消失している。そのため、柱穴は削平を被っていない東及び南側については良好に遺存していたが、それ以外では、かろうじて189・193・278-O Pの各柱穴がその底部付近を残しているのみであった。遺存している柱穴からは、比較的多くの柱痕跡を検出することができた。各柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、直径30cm前後のものが最も多い。柱痕から確認できる柱の直径は10~15cm程度である。柱芯との間隔は、桁行で2.1m~2.36m、梁行で1.95m~2.16mを計り、総じて桁行の間隔が長いことが判る。柱穴掘り方内は、地山の黄褐色粘土のブロックを含む暗赤褐色~暗褐色の粘質土で埋めもどされている。柱痕内には褐色~黄褐色の粘質土が認められ、掘り方埋め土と容易に識別が可能であった。残存している各柱穴も後世の削平により浅いものが多く、深いものでも確認面より40cmほどであった。緩斜面に立地するという地形的な条件から、各柱穴の掘り込みは、低い方は浅く、高い方は深く掘られるという傾向を示している。これにより柱穴底面のレベルは、若干の差はあるもののほぼ一定している。193-O P底面には挙大の円礫が根石として入れられていた。229-O Pの底面には、柱に添わせ、その回りを取り囲む様に土師器及び瓦器の皿が入れ置かれていた。この柱穴は、南側梁行の西より2本目に当たっている。ちょうど張り出し部の取



第37図 228-O B平・断面図

り付き部分に相当する。これらの土器群は、恐らく建物の地鎮に係わる遺物と考えられる。建物東側には、庇が設けられている。庇は幅約1.0mを有し、中央の2間に付設されている。南側には張り出し部が存在する。幅約1.8mを有し、中央の2間に付随している。この張り出し部の中には、ほぼ全面にわたって土坑（200-O O）が掘削されている。200-O Oは隣接する各柱穴と一際切り合いをもっていない。特に230-O Pとの関係をみると、まさにこの柱穴を避ける様につくられている点が注目できよう。この点からも土坑200-O Oは、建物200-O Bに伴い掘削された可能性が極めて高いと考えられる。200-O O埋土から



第38図 229・230-O P出土遺物実測図  
(7のみ230-O P)

は、完形品を含む多くの瓦器・土師器が出土したが、これらの土器は、柱穴229・230-O Pから出土した土器類と時期的に齟齬をきたすものではない。しかしこの土坑の機能については、現時点では不明と言わざるを得ない。建物の身舎部分の面積は、約72m<sup>2</sup>を計測する。又、東側庇部分は、約4.0m<sup>2</sup>をそれぞれ計る。桁行方向はN-13°-Wにとっている。

挿図 No. 図版	層位 地区	器形 器種	法量 1 h b	調整	胎土	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	残存率	備考
第38図 1	F13N E	土師器 皿	口径 (8.0) 器高 (1.55)	口縁部、内面、外面ナデ調整	1.0mm以下の白、褐色砂粒を含む	良好	10Y R8/3 (浅黄橙色) 10Y R8/3 (浅黄橙色) 10Y R7/6 (明黄褐色)	20%	
第38図 2 図版22	F13N E	土師器 皿	口径 8.8 器高 1.7	口縁部横ナデ、内面ナデ、外面指オサエ	3.0mm以下の白、褐色砂粒を含む	良好	5Y R6/6 (橙色) 7.5Y R6/4 (にぶい橙色) 7.5Y R6/4 (にぶい橙色)	98%	
第38図 3 図版22	F13N E	土師器 皿	口径 9.4 器高 1.5	口縁部横ナデ、内面ナデ、外面指オサエ	0.5mm以下の砂粒を含む	不良	10Y R8/4 (浅黄橙色) 10Y R8/4 (浅黄橙色) 10Y R8/4 (浅黄橙色)	80%	
第38図 4 図版22	F13N E	土師器 皿	口径 9.6 器高 1.4	口縁部内面横ナデ、外面指オサエ	0.5mm以下の砂粒を含む	良好	2.5Y5/1 (黄灰色) 2.5Y5/1 (黄灰色) 2.5Y5/1 (黄灰色)	90%	
第38図 5	F13N E	土師器 皿	口径 (14.0) 器高 (2.55)	口縁部、内面ナデ、外面指オサエ	1.0mm以下の黒色砂粒を少し含む	良好	10Y R8/2 (灰白色) 10Y R8/2 (灰白色) 10Y R8/2 (灰白色)	30%	
第38図 6 図版22	F13N E	瓦器 皿	口径 9.4 器高 2.2	口縁部横ナデ、内面ナデ→ヘラミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の白、灰色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	98%	
第38図 7	F13N E	瓦器 椀	器高 (1.3) 高台径 (4.8)	内面ナデ、外面指オサエ	1.0mm以下の白色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	

第14表 229・230-O P出土遺物観察表

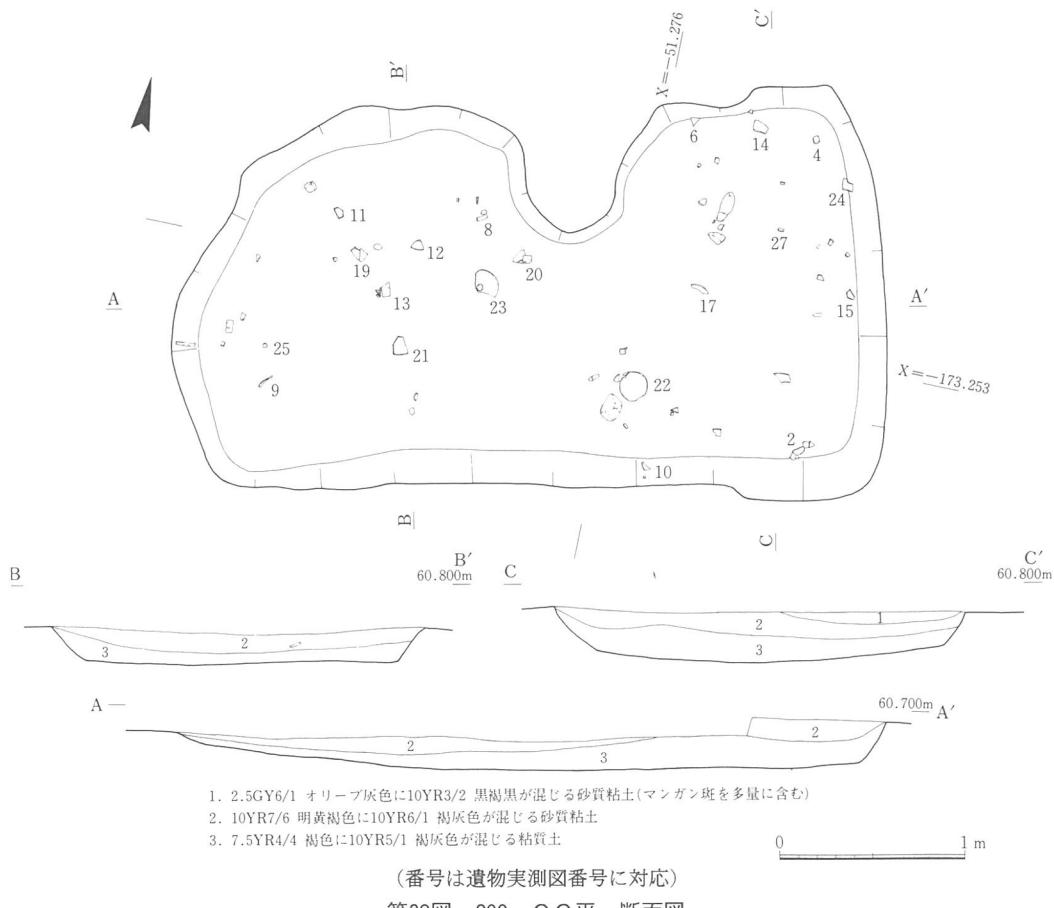
229-O Pからは、土師器及び瓦器の皿が出土している。これらの土器には完形品が多く含まれ、柱の回りに立てかける様に出土している。この出土状態からみて、柱を建てる際に入れられたものと考えられる。

土師器は口径8.0~14.0cm、器高1.5~2.5cmほどで、口縁部の内外面をヨコナデ調整によるものである。口縁部外面は、ヨコナデ調整による稜をもっている。底面は未調整で、指頭圧痕を顕著に残している。

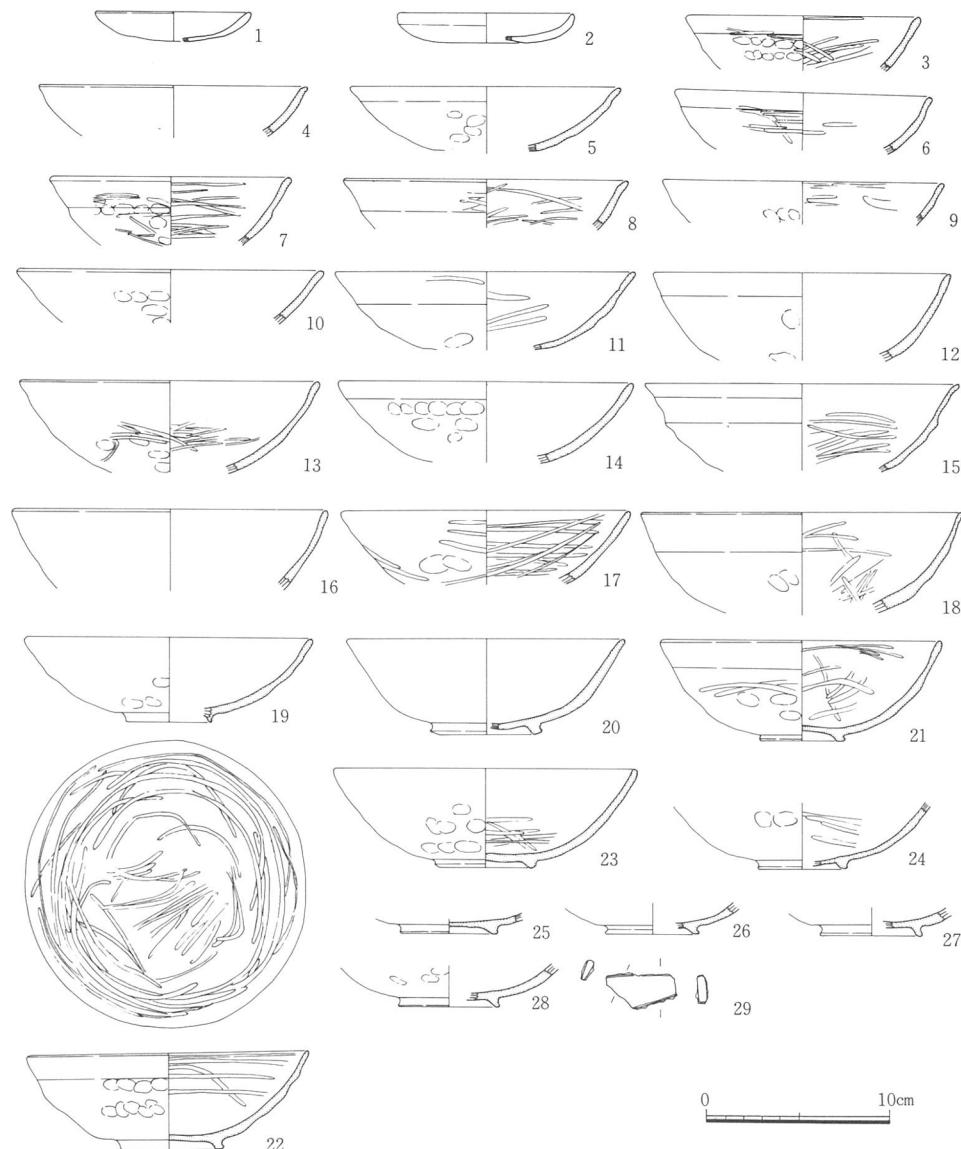
瓦器は口径9.4cm、器高2.2cmを計る皿で、口縁部内面及び見込み部に粗いヘラミガキが施されている。

230-O Pからも瓦器碗1点が検出されている。ハの字に開く台形の高台が付されている。

図示した遺物はこれらのみであるが、他の柱穴内からも、細片化した瓦器が僅かに検出された。これらの土器からみて、この建物は12世紀中葉～後半に位置付けられよう。



第39図 200-O 平・断面図



第40図 200-OO出土遺物実測図

200-OO

228-O B南側張り出し部に付設されたと考えられる土坑である。建物に伴う可能性が高い点は、230-O Pとの関係からも首肯し得る。この土坑は長軸3.9m、短軸2.0m、深さ0.3mをそれぞれ計測する。土坑底面は緩やかなすり鉢状を呈し、平坦に仕上げられている。土坑内埋土は3層に分層することが可能で、褐色～黒褐色の粘質土が堆積している。

掲図 No. 図版	層位 地 区	器 形 器 種	法 量 <i>l</i> <i>h</i> <i>b</i>	調 整	胎 土	焼成	(内面) (外 面) (断面)	残存 率	備 考
第40図 1	F13N E	土師器 皿	口径 器高 — (8.2) 1.6 —	内面、外面ナデ調整	2.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好	2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色)	30%	
第40図 2	F13N F	土師器 皿	口径 器高 — (9.6) 1.6 —	全体に磨滅が激しく調整不 明	1.0mm以下の中白、 灰色砂粒を多く 含む	普通	10Y R8/2 (灰白色) 10Y R8/2 (灰白色) 10Y R8/2 (灰白色)	60%	
第40図 3	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (12.6) (3.0) —	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ	0.5mm以下の白、 褐色砂粒を少し 含む	良好	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/2 (灰白色)	10%	
第40図 4	F13M F	瓦器 椀	口径 器高 — (14.4) (2.8) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の褐色 砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	5%	
第40図 5	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (14.6) (3.5) —	口縁部横ナデ、内面磨滅の 為不明、外面指オサエ	0.5mm以下の赤 褐色砂粒を少し 含む	良好	10Y5/1 (灰色) 10Y5/1 (灰色) 10Y R8/3 (浅黄橙色)	20%	
第40図 6	F13M F	瓦器 椀	口径 器高 — (13.8) (3.2) —	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ →ヘラミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	5%	
第40図 7	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (13.0) (3.75) —	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ →ヘラミガキ	2.0mm以下の白 色砂礫、砂粒を 含む	良好	7.5Y5/1 (灰色) 7.5Y5/1 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	5%	
第40図 8	F13N E	瓦器 椀	口径 器高 — (15.2) (2.7) —	口縁部横ナデ→ヘラミガキ、 内面、外面→ヘラミガキ	2.0mm以下の白 色砂礫、砂粒を 含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	5%	
第40図 9	F13N E	瓦器 椀	口径 器高 — (15.2) (2.35) —	口縁部、内面ナデ→ヘラミ ガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	良好	10Y4/1 (灰色) 10Y4/1 (灰色) 5 Y8/3 (淡黄色)	10%	
第40図 10	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (16.4) (2.95) —	口縁部、内面ナデ、外面指 オサエ	2.0mm以下の白、 褐色砂粒を含む	不良	2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色) 2.5Y8/3 (淡黄色)	5%	
第40図 11	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (15.8) (4.2) —	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の白 色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	40%	
第40図 12	F12N F	瓦器 椀	口径 器高 — (16.0) (4.8) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N5/0 (灰色) N5/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	20%	
第40図 13	F13N E	瓦器 椀	口径 器高 — (16.0) (4.9) —	口縁部、横ナデ、内面ナデ →ヘラミガキ、外面指オサ エ→ヘラミガキ	0.5mm以下の褐色 砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N3/0 (暗灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	30%	
第40図 14	F13M F	瓦器 椀	口径 器高 — (15.8) (4.4) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の褐色 砂粒を少し含 む	良好	10Y5/1 (灰色) 10Y5/1 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	25%	
第40図 15	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (16.8) (4.7) —	口縁部、横ナデ、内面、外 面ナデ	1.0mm以下の白 色砂礫、砂粒を 含む	良好	N8/0 (灰白色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	10%	
第40図 16	F13N E	瓦器 椀	口径 器高 — (17.2) (4.25) —	口縁部横ナデ、内面、外 面ナデ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N3/0 (暗灰色) N3/0 (暗灰色) 10Y8/1 (灰白色)	10%	
第40図 17	F13N F	瓦器 椀	口径 器高 — (15.8) (3.95) —	口縁部ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ→ ヘラミガキ	0.5mm以下の白 色砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	20%	
第40図 18	F13N E	瓦器 椀	口径 器高 — (17.2) (5.4) —	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の灰、 褐色砂粒を少し含 む	良好	2.5G Y4/1 (暗オリーブ灰色) 2.5G Y4/1 (暗オリーブ灰色) N8/0 (灰白色)	40%	
第40図 19	F13N E	瓦器 椀	口径 器高 高台径 — (15.4) 4.6 (4.7) —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下の褐色 砂粒を少し含 む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	25%	

第15表 200-O O出土遺物観察表(1)

掲図 No. 図版	層位 地区	器形 器種	法量 l h b	調 整	胎 土	焼成	色 調 (内面) (外面) (断面)	残存 率	備 考
第40図 20 図版22	F13N E	瓦器 椀	口径 (14.8) 器高 5.1 高台径 (6.2)	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ	1.0mm以下の灰 色砂粒を含む	良好	N6/0 (灰色) N5/0 (灰色) N8/0 (灰色)	40%	
第40図 21 図版	F13N E	瓦器 椀	口径 (14.8) 器高 5.4 高台径 4.4	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ →ヘラミガキ	1.0mm以下の中、 灰色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) 2.5Y8/2 (灰白色)	25%	
第40図 22 図版22	F13N F	瓦器 椀	口径 15.0 器高 5.2 高台径 5.6	口縁部横ナデ、内面ナデ→ ヘラミガキ、外面指オサエ	2.0mm以下の中、 褐色砂礫、砂粒 を含む	不良	5YR7/3 (にぶい橙色) 5YR7/3 (にぶい橙色) 5YR7/3 (にぶい橙色)	90%	
第40図 23 図版22	F13N E	瓦器 椀	口径 (16.4) 器高 5.3 高台径 (5.5)	口縁部ナデ、内面ナデ→ヘ ラミガキ、外面指オサエ	2.0mm以下の中、 灰色砂粒を含む	不良	10YR8/3 (浅黄橙色) 10YR8/3 (浅黄橙色) 10YR8/3 (浅黄橙色)	50%	
第40図 24	F13N F	瓦器 椀	— 器高 (3.65) 高台径 (4.8)	内面ナデ→ヘラミガキ、外 面指オサエ	2.0mm以下の中、 白色砂礫、砂粒 を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	25%	
第40図 25	F13N E	瓦器 椀	— 器高 (0.8) 高台径 (5.3)	内面ナデ、高台部横ナデ	0.5mm以下の中、 白色砂粒を含む	良好	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y8/1 (灰白色)	10%	
第40図 26	F13N E	瓦器 椀	— 器高 (1.7) 高台径 (5.1)	内面ナデ、外面磨滅の為調 整不明	0.5mm以下の中、 白色砂粒を少し含 む	不良	7.5Y5/1 (灰色) 7.5Y5/1 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	5 %	
第40図 27	F13M F	瓦器 椀	— 器高 (1.6) 高台径 (5.4)	高台部横ナデ、その他磨滅 の為調整不明	0.5mm以下の中、 褐色砂粒を含む	普通	7.5Y5/1 (灰色) 7.5Y5/1 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	5 %	
第40図 28	F13N E	瓦器 椀	— 器高 (2.4) 高台径 (5.4)	内面ナデ→ヘラミガキ、外 面指オサエ	0.5mm以下の中、 白色砂粒を少し含 む	良好	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) 10Y8/1 (灰白色)	15%	
第40図 29	F13N E	鉄製品	最大長 (3.8) 最大幅 (1.95) 最大厚 (0.7)	切出状に刃部を付ける。背 は平坦	—	—	—	—	5.05g

第16表 200-OO出土遺物観察表(2)

この堆積土中には、細かい炭化物の混入が多く認められた。

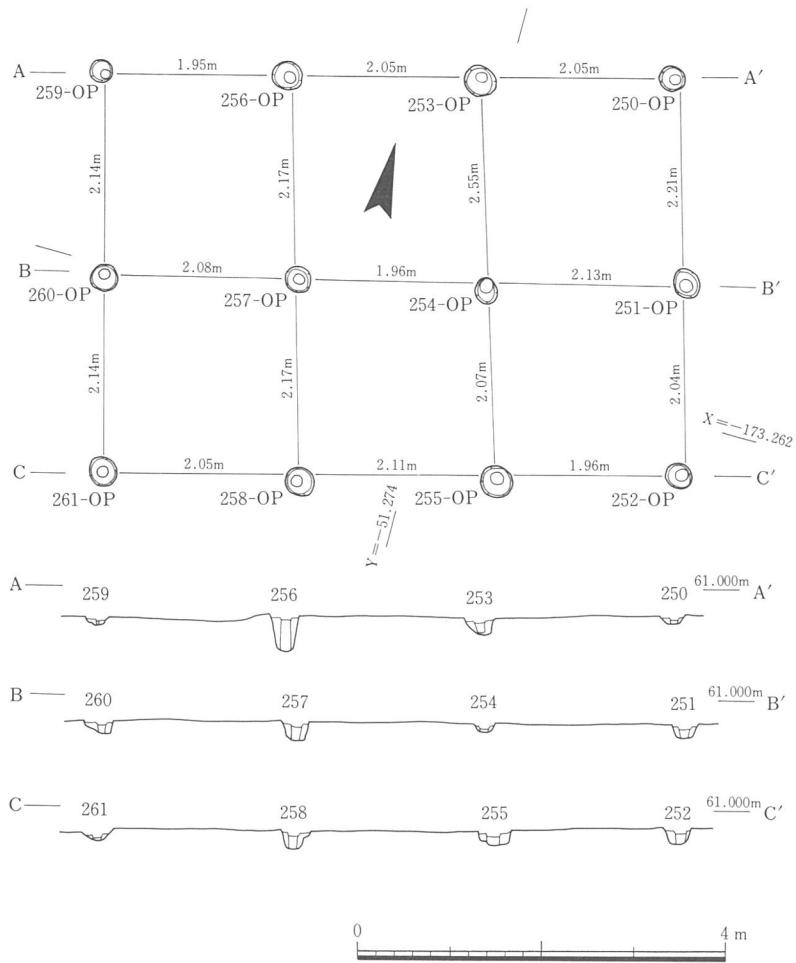
遺物は、土坑内全体からその出土を見ている。遺物は大半が土器で、他には刀子状を呈する鉄製品の破片が1点出土したのみである。土器は土師器と瓦器で、破片数からみると瓦器が土師器の約2倍存在している。

200-OOからは、破片数にして土師器73・瓦器115及び鉄器1が出土している。

土器類は、その大半が残存率10%以下の細片であるため、器形全体の復元は困難である。

しかし、瓦器椀ではその多くが口径15.0cm前後、器高5.0cm程度を計測するものである。

形態的には、体部はやや丸味を有し、口縁部が若干外反するタイプである。器面の磨滅が著しいため、ヨコナデ、ヘラミガキなどの調整を確認し得るものは少ない。確認できるものでは内外面共にやや太めのヘラミガキが施される。又、体部外面には、指腹部による圧痕が口縁部に平行し、連続的に認められる。時期的には、瓦器椀盛行期直前を考えることができ、12世紀中葉～後半代に比定できる。



第41図 250-O B 平・断面図

### 250-O B

228-O B の南側で検出された総柱の掘立柱建物である。梁行 2 間、桁行 3 間の規模を有している。この建物も 228-O B 同様、後世の耕地造成のための削平を被っており、柱穴も多い。各柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、直径 30cm 前後である。柱穴からは柱痕跡を検出することができた。柱痕から推定できる柱の直径は、12~15cm ほどである。柱芯と間の距離は、1.95m~2.25m までで、30cm ほどの差をもっているが、全体としては、2.1m 前後にその集中が認められる。柱掘り方内は、暗褐色粘土のブロックを若干含む黄褐色系の地山粘土で埋めもどされている。柱痕内には、暗褐色~灰黄色系のシルト質土が

認められた。又、253-O Pについては、柱痕跡にそって暗灰黄色の粘土が薄く入り込んでいた。柱穴内からは、若干の瓦器細片の出土をみたが、図示し得るものはなかった。

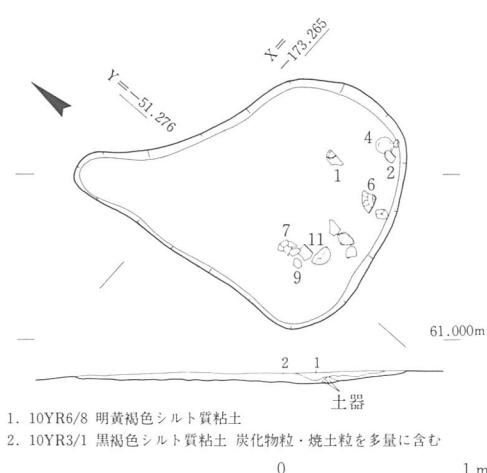
建物の平面積は25.6m<sup>2</sup>、桁行方位はN-15°-Wにとっている。

次に228-O Bとの関係をみてみると、250-O Bは、若干の差はあるものの、228-O Bとほぼ同方位をとっている。又、両建物は約7mの間隔を保ち、平行して建てられていることが判る。250-O Bの柱穴内からは、228-O Bと直接比較し得る土器の出土はみなかった。しかし、両者共に柱穴内の埋土の特徴は近似しており、これら2棟の建物は、同時併存した可能性が高いと考えられる。

### 266-O O

250-O Bの南西に近接して検出された浅い落ち込みの土坑である。長軸1.8m、短軸1.3mを計測する。削平が激しいため、最も深い部分でも6cmほどしか残存していない。埋土は上層に地山に近い明黄褐色シルト質粘土があり、その下に黒褐色のシルト質粘土が堆積していた。この層中には、多量の炭化物粒子や焼土が混入していた。この土坑からは多くの土器が検出されたが、それらは全てこの層中からの出土である。出土した土器は完形品が多く含まれていた。この土坑は、250-O B南側に隣接して立地しており、遺物の出土状態、土層の堆積状況からみて、250-O Bに伴い地鎮を行った土坑と考えられる。

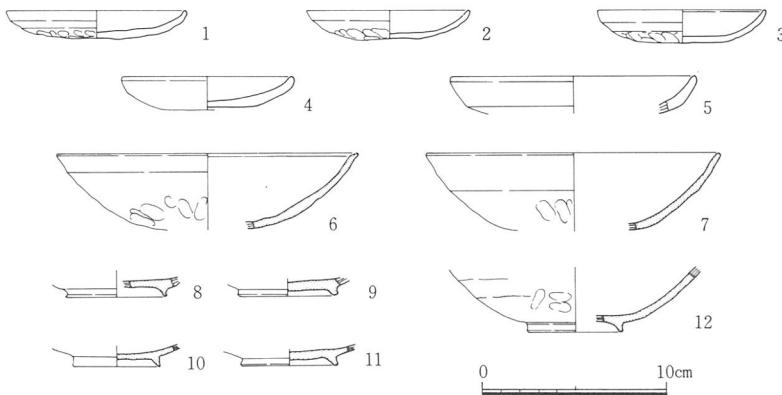
出土した遺物は土師器皿及び瓦器碗である。土師器は口径9.0~13.4cm、器高1.4~1.8



第42図 266-O O 平・断面図

cmほどで、内外面をヨコナデ調整により仕上げる。底部は未調整で指頭痕を多く残している。瓦器は全て碗で口径16cm前後、高台径5.0cm前後である。磨滅が激しく、調整は観察できない。高台は断面台形を呈しハの字状に開いている。

これらの遺物は、250-O Bの地鎮に際し使用された土器群と思われる。これら土器群の諸特徴は、200-O O、229-O P出土土器と比べ、若干新しい様相を示すものが含まれるが、ほぼ同時期の範囲内で捉えることができる。



第43図 266-OO出土遺物実測図

挿図 No. 図版	層位 地 区	器形 器種	法量 l h b	調整	胎土	焼成	(内面) (外面) (断面)	残存率	備考
第43図 1	F13Q F	土師器皿	口径 (9.8) 器高 1.5 —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下砂粒を少し含む	良好	7.5Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R8/2 (灰白色)	35%	
第43図 2	F13Q F	土師器皿	口径 (8.8) 器高 1.5 —	口縁部横ナデ、内面ナデ、 外面指オサエ	0.5mm以下砂粒を少し含む	不良	7.5Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R8/2 (灰白色)	40%	
第43図 3	F13Q F	土師器皿	口径 (9.2) 器高 1.8 —	口縁部、内面横ナデ、外面 指オサエ	0.5mm以下砂粒を少し含む	良好	7.5Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R8/2 (灰白色) 7.5Y R8/2 (灰白色)	30%	
第43図 4	F13Q F	土師器皿	口径 (9.2) 器高 1.8 —	口縁部、内面、外面ナデ	4.0mm以下白、 褐色砂礫、砂粒 を含む	良好	5 Y R8/3 (浅橙色) 5 Y R7/4 (にぶい橙色) 2.5 Y R7/4 (淡赤橙色)	50%	
第43図 5	F13Q F	土師器皿	口径 (13.2) 器高 (2.0) —	口縁部、内面、外面ナデ	1.0mm以下白、 褐色砂粒を含む	良好	2.5 Y 8/2 (灰白色) 2.5 Y 8/2 (灰白色) 2.5 Y 8/2 (灰白色)	10%	
第43図 6	F13Q F	瓦器 椀	口径 (16.4) 器高 (4.1) —	口縁部横ナデ、内面磨滅の 為調整不明、外面指オサエ	0.5mm以下砂粒を少し含む	不良	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 7.5Y R8/2 (灰白色)	25%	
第43図 7	F13Q F	瓦器 椀	口径 (16.0) 器高 (4.1) —	口縁部横ナデ、他全体に磨 滅が激しく調整不明	0.5mm以下砂粒を少し含む	不良	N4/0 (灰色) N4/0 (灰色) 2.5 Y 7/2 (灰黄色)	30%	
第43図 8	F13Q F	瓦器 椀	器高 (1.05) 高台径 (5.5)	全体に磨滅の為調整不明	0.5mm以下砂粒を少し含む	不良	5 Y 5/1 (灰色) 5 Y 5/1 (灰色) 7.5 Y 6/1 (灰色)	10%	
第43図 9	F13Q F	瓦器 椀	— 器高 (0.9) 高台径 (5.2)	内面ナデ、高台部とりつけ 横ナデ	1.0mm以下白色砂粒を含む	良好	N5/0 (灰色) N4/0 (灰色) N8/0 (灰白色)	30%	
第43図 10	F13Q F	瓦器 椀	— 器高 (1.2) 高台径 (4.7)	全体に磨滅の為調整不明	0.5mm以下砂粒を少し含む	不良	2.5 Y 8/1 (灰白色) 2.5 Y R7/6 (橙色) 2.5 Y 8/1 (灰白色)	20%	
第43図 11	F13Q F	瓦器 椀	— 器高 (1.1) 高台径 (5.2)	内面、外面ナデ調整、高台 部とりつけ横ナデ	1.0mm以下白、 灰、褐色砂粒を 含む	良好	N8/0 (灰白色) 5 Y 8/2 (灰白色) 5 Y 8/2 (灰白色)	30%	
第43図 12	F13Q F	瓦器 椀	— 器高 (3.5) 高台径 (5.2)	全体に磨滅の為調整不明	0.5mm以下砂粒を少し含む	不良	10 Y 3/1 (オリーブ黒色) 10 Y 3/1 (オリーブ黒色) 2.5 Y 8/1 (灰白色)	20%	

第17表 266-OO出土遺物観察表

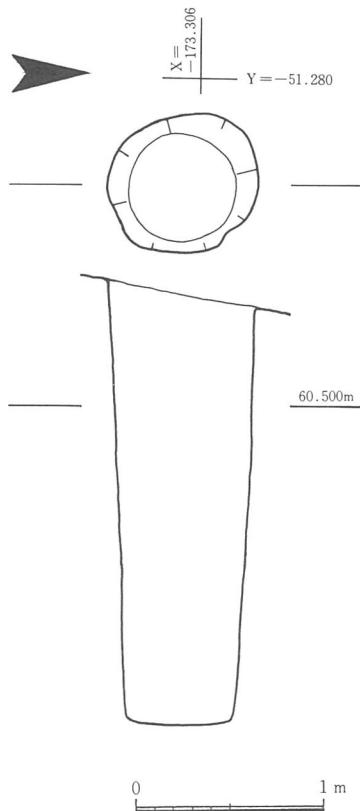
#### 4 IV区

IV区は、全調査区のほぼ南側半分に相当する。土層の堆積状態は、前述の各区とほぼ同様で、基本的には、水田耕作土、床土、遺物包含層、地山となる。遺物包含層は全体に約30cmの厚さをもって堆積している。又、301-O Wより北側は遺物包含層下に約20cmほどの厚さで整地層が認められる。

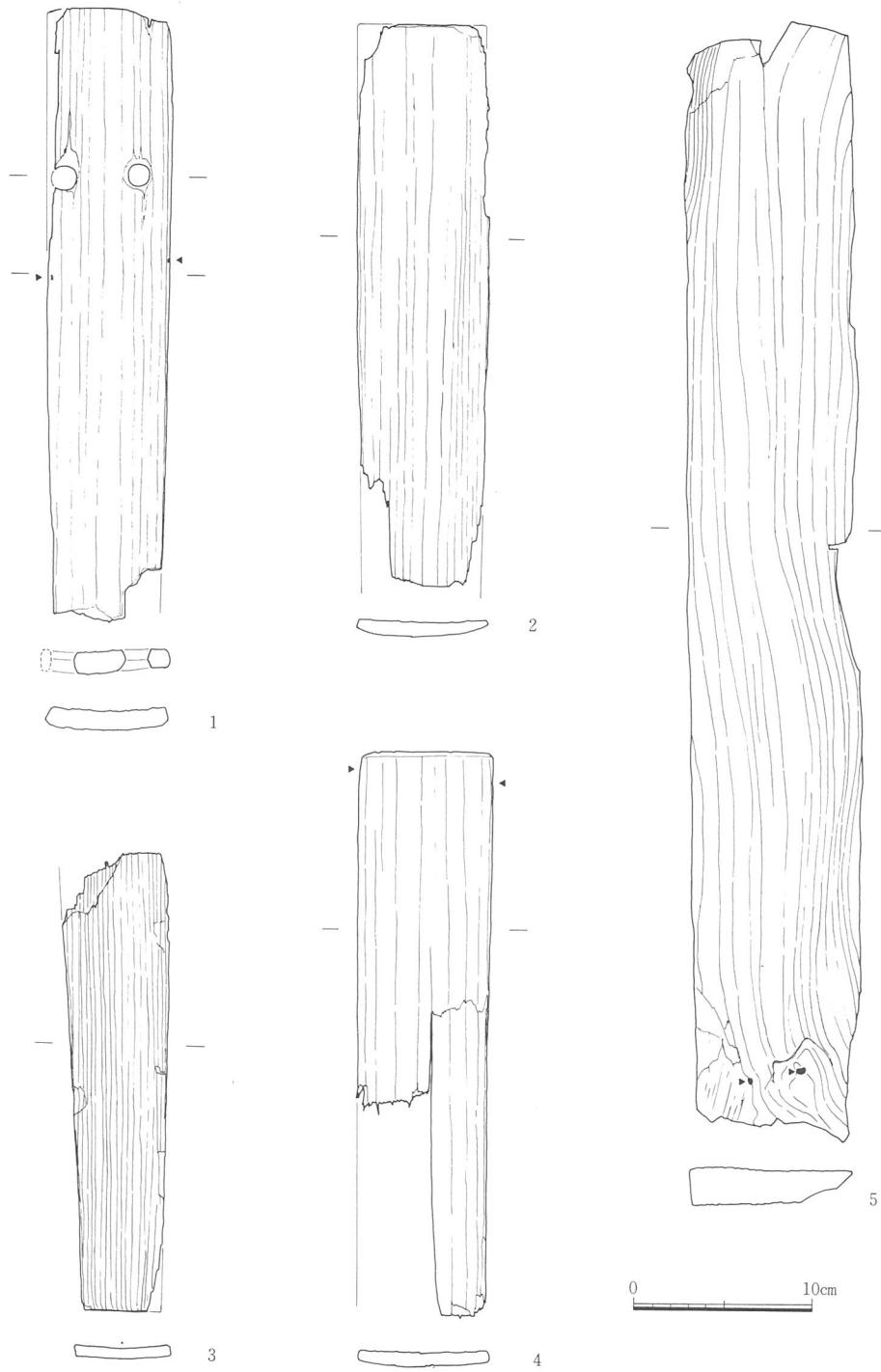
IV区ではIII区南側に比べて、遺構の分布は極めて希薄である。又、III区南側の検出遺構よりも時期的に下降するものばかりである。主な遺構としては、耕作時の鋤溝と若干のピット及び井戸が存在する。鋤溝は全て北東～南西方向に走るもので、北側の各調査区で検出された鋤溝と同方向をとっている。各鋤溝内には、灰褐色系の粘質土が堆積している。埋土内からはほとんど遺物は検出されなかった。僅かに304、308-O Sの各溝より若干の瓦器及び土師器細片を検出したにすぎない。ピットは直径10cm前後のものであるが、建物などまとまりを持つものではなかった。

301-O W

直径0.8m、深さ約2.3mを計測する素掘りの井戸である。上面よりほぼ垂直に掘削されている。中には井戸枠などの施設は設けられていない。地山は上面では黄褐色の粘質土であるが、底面は礫層となっている。井戸の埋土には、その上部約1mほどを、青灰色の均質な粘土が堆積していた。それより下は、砂礫層となり、下部に向かうにつれて、円礫の混入が著しくなる。上部の粘土層中からは染付磁器碗の細片が1点出土したにとどまる。しかし、下部の礫層中からは、多くの遺物を検出している。湧水が多かったため、木製品が良好な状態で遺存していた。木製品には、桶側板や底板などがみられる。又、それ以外にも加工木が多く含まれていた。これらと共に屋瓦も若干出土している。土器類の出土は少なく、僅かに施釉陶器が1点検出されたのみである。この井戸は、これらの遺物から18世紀後半代のものと思われる。



第44図 301-O W平・断面図



第45図 301-O W出土遺物実測図(1)